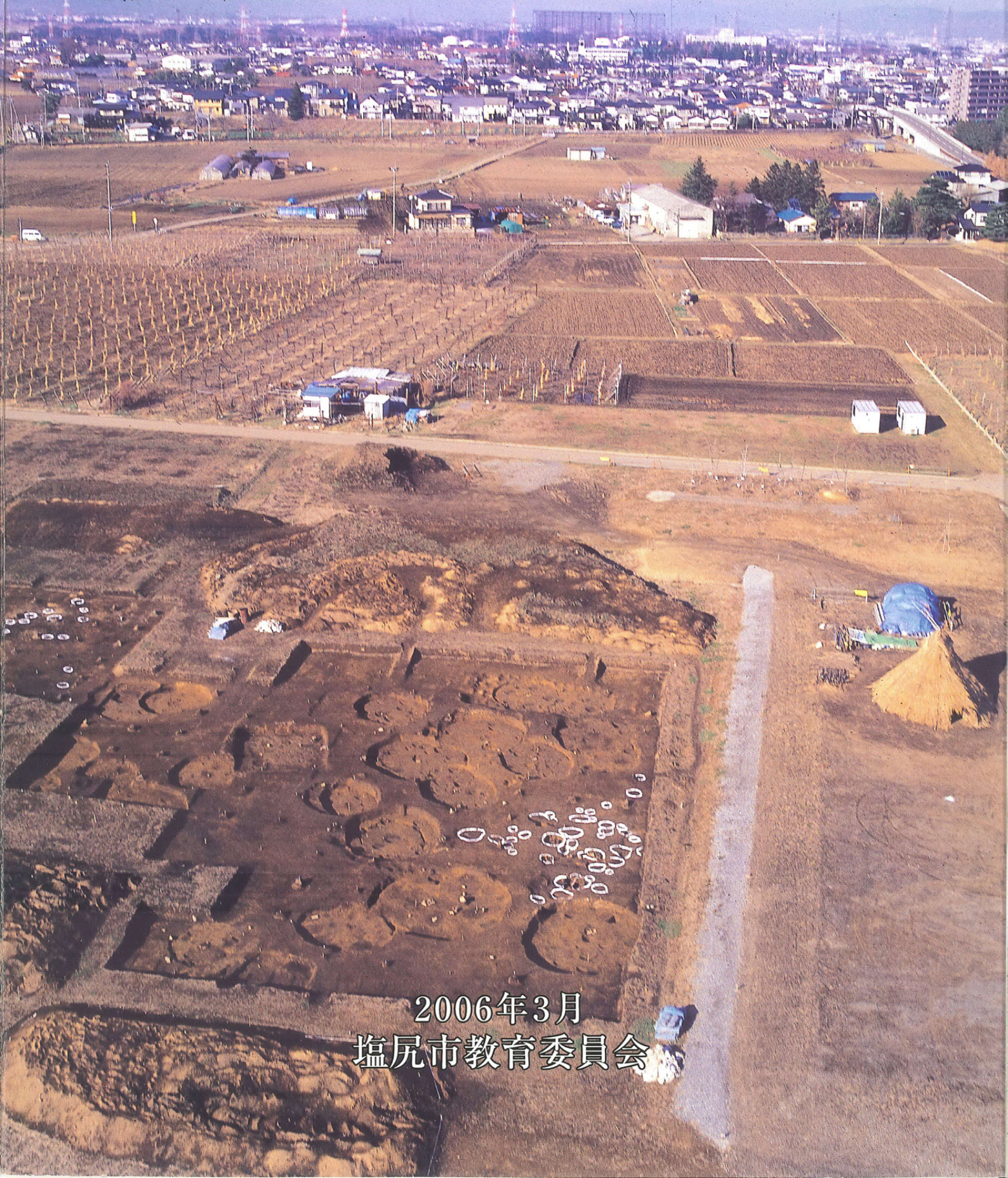


# 史跡 平出遺跡

—平成16年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る発掘調査概報—



2006年3月  
塩尻市教育委員会

史 跡

# 平 出 遺 跡

—平成16年度記念物保存修理事業  
(環境整備)に係る発掘調査概報—

目次

1	発掘調査の目的と方法	1
2	発掘調査の経過	5
3	遺跡の層序	5
4	調査概要	6
5	遺構と遺物	8
6	「縄文の村」地区の整備計画	40
7	まとめ	42

例言・凡例

- 1 本書は、史跡平出遺跡記念物保存修理事業（環境整備）に係わる発掘調査概報である。
- 2 発掘調査は、平成16年度記念物保存修理事業（環境整備）で、整理調査は平成17年度史跡等総合整備活用推進事業により、国庫及び県費の補助を受け塩尻市教育委員会が実施した。
- 3 発掘作業は、平成16年6月23日から平成17年2月8日まで行った。  
整理作業は、平成17年6月14日から平成18年3月31日まで行った。
- 4 調査指導  
塩尻市史跡平出遺跡整備委員会  
委員長 戸沢充則（明治大学名誉教授）  
副委員長 樋口昇一（長野県文化財保護審議会委員）  
委員 桐原 健（信州豊南短期大学非常勤講師）  
宮本長二郎（東北芸術工科大学教授）  
佐々木邦博（信州大学教授）  
辻 誠一郎（東京大学教授）
- 5 本書の執筆・編集  
小林康男、小松 学、塩原真樹、中野実佐雄
- 6 本報告書に係る出土品・諸記録は、塩尻市立平出博物館で保管している。
- 7 本報告書の遺構図の縮尺率は基本的に1/60とした。
- 8 縄文土器の年代観については、『長野県史』考古資料編全1巻(四)遺構・遺物によっている。

# 1 発掘調査の目的と方法

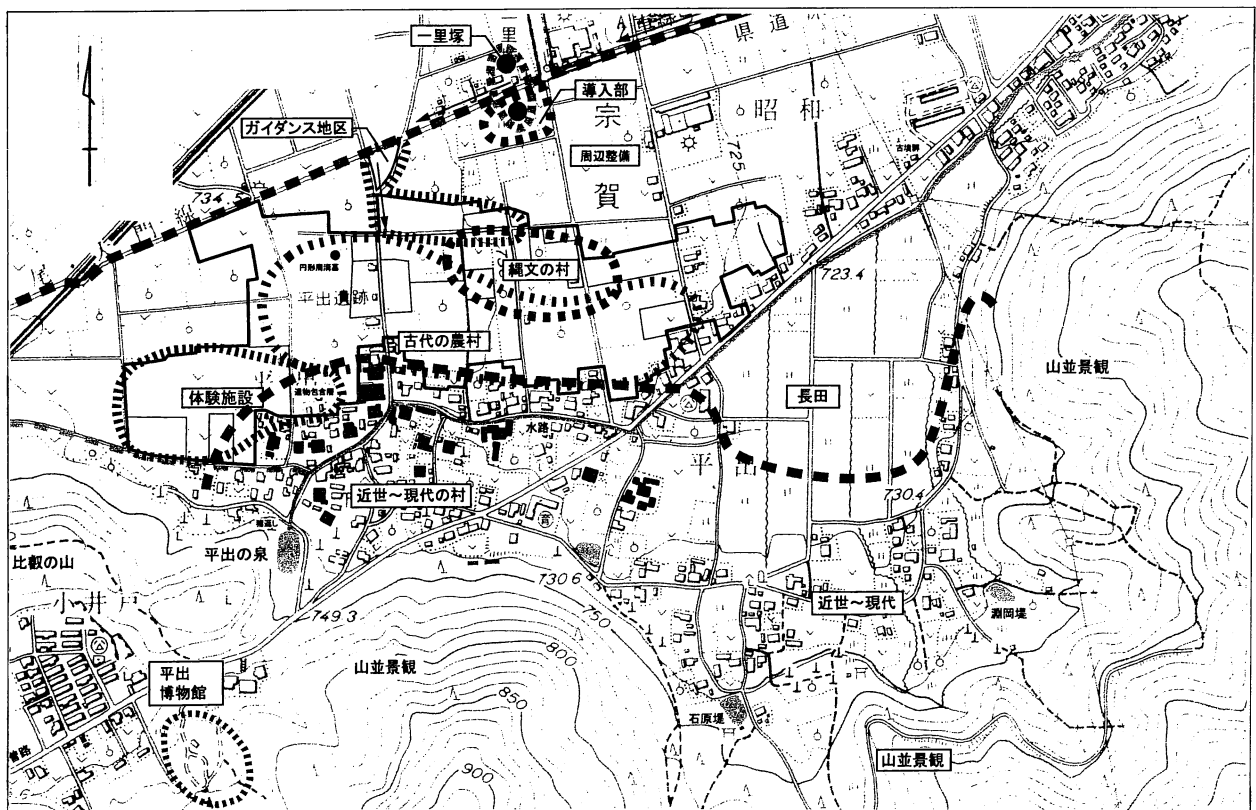
## (1) 発掘調査の目的

昭和 27 年に国史跡に指定された平出遺跡は、昭和 52 年、「史跡平出遺跡保存管理計画書」が策定され、永久保存地区・現状変更許容地区のエリア設定、用地の公有化および整備・活用の推進など保存管理の基本的方針が決定された。

この計画に基づき、塩尻市では、平成 9 年度から平成 22 年度までの継続事業として永久保存地区を中心とした約 7.3ha の用地の公有化事業に着手した。また、平成 11 年度には塩尻市史跡平出遺跡整備委員会（委員長 戸沢充則）を発足し、整備・活用計画の検討を進め、平成 13 年度に整備基本計画を策定した。整備基本計画では、平出遺跡およびその周辺を、「導入部」「縄文の村地区」「古代の農村地区」「ガイダンス地区」「体験学習施設地区」の 5 地区を設定した。整備は、平成 15 年度から年次計画により、「縄文の村地区」「ガイダンス地区」「古代の農村」の順に進めることになり、平成 15 年度には「縄文の村」の整備に着手した。

整備を進めるにあたっては、発掘調査を整備の重要な要素と位置づけ、「各時代の集落構造・社会構造の解明」を目指し、「整備対象遺構の選定資料」を得ることを目的としている。発掘調査では、①遺構・遺物の状況の把握、②時代別の特徴の把握、③「平出の地」の重層性の明確化、④史跡整備に必要な情報の整理、を主たる調査項目にあげている。

発掘調査は整備の第 1 段階にあたり、「遺構確認の必要な地区に対し発掘調査を行い、その成果を踏まえ各地区を順次整備していく」とし、発掘調査結果を基にして整備計画を策定することになっている。



第1図 平出遺跡整備エリア図

## (2) 発掘調査区域の設定

発掘調査区域の設定にあたっては、公有化が完了した区域であり、且つ整備年次別計画の順序に基づき設定している。

平成 16 年度の発掘調査区域は、「縄文の村」整備地区にあっている。この「縄文の村」集落復元地区では、今回の調査区と隣接する区域で平成 14 年度に発掘調査が行われており、翌 15 年度からは整備事業に着手している。平成 16 年度には平成 14 年度に行われた発掘調査の成果をもとに、縄文時代中期中葉を対象とした復元住居が 3 棟建てられ、「縄文の村」の姿が現れ始めている。

「縄文の村」集落復元地区の整備方針では、「縄文時代の地形と竪穴住居等の復元により縄文人が生活していた空間を創出する。縄文時代の生活（採取・加工・育成等）空間体験をとおした学習・遊びの中から、縄文人の自然との関わり、生活観を迫体験する場所として整備を行う。」としている。このため発掘調査では、復元住居の対象遺構や集落構成を再現するための資料や植生、旧地形の復元のための基礎資料を得るという目的のもと、必要最小限の発掘調査区域を設定した。

今回の調査区の設定にあたっては、平成 14 年度調査および昭和 61 年度の土地改良事業に伴う発掘調査の成果に基づき、整備対象地区内の 1,500 m<sup>2</sup>の範囲を調査区域として設定した。

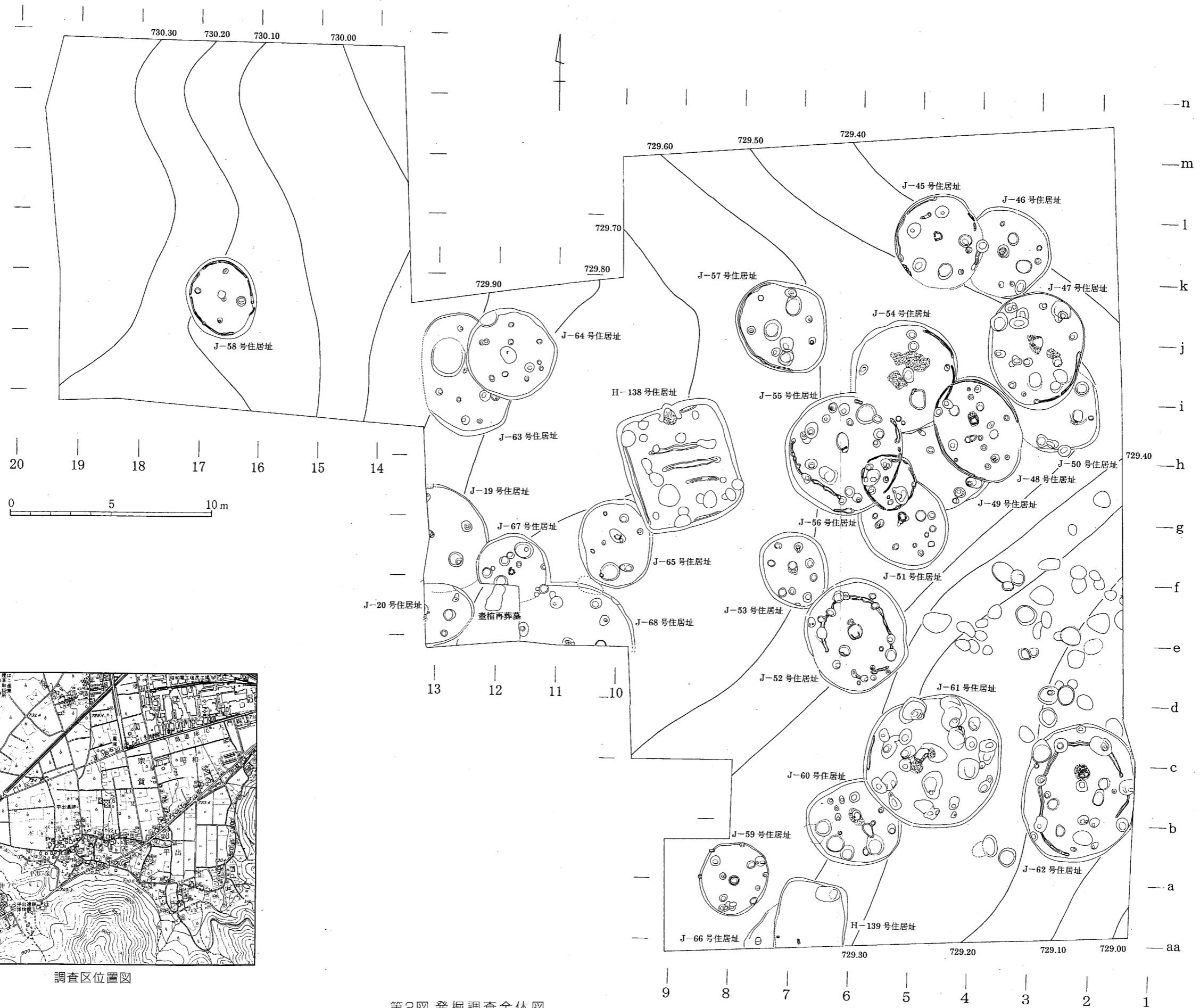
発掘調査の方法としては、より多くの情報を得るため、表土からすべて人力による掘り下げを行い、なるべく高い位置での遺構の検出に努め、当時の地形復元を行う観点から生活面を把握することに重点をおいた。

遺構調査は、東西、南北方向に土層観察用のベルトを設定し、ベルトについては土層観察等記録をとった後に取り外しながら調査を行った。なお、この手法に関しては平成 16 年 10 月 29 日付で文化庁より出された「行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準（報告）」では、原則としてベルトは取り外さず保存するように指示されているが、文化庁からの指示があった時点では既にベルトは取り外されており、平成 17 年度調査から新たな文化庁の調査標準に沿った調査を行っている。ピットや土坑の調査では、半裁して記録をとるに留め、完掘は行っていない。今回検出された、弥生時代の再葬墓に関しては整備対象時期と異なることもあり、詳細な調査は行わず埋め戻した。このように調査では今後の再調査も念頭に置き、必要最低限の調査にとどめたため、検出住居址以外の土坑等、調査区内に未掘部分も多く残されていることを明記しておきたい。

遺物の取り上げに関しては、住居内から出土した遺物については出土場所と高さを記録して取り上げ、遺構外出土の遺物に関しては、小グリッド単位で取り上げを実施した。この際、埋甕炉に使用された炉体土器は遺構の一部であるとの解釈のもと、遺構保護を優先し記録をとった後に住居址とともに埋め戻した。遺構の埋め戻しにおいては住居址内に遺構保護のために砂を入れてから、その上に土を入れる方法をとった。

調査にあたり調査区内に設定したグリッドは、平出遺跡内に設定してある 30m 方眼の大グリッドを基準にしており、この大グリッドを東西及び南北に 10 分割して 3m 方眼の小グリッドを設定している。グリッドの呼称は、東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、アルファベットは小文字で表記している。

記録は、遺構平面図、遺構セクション図については、原則として 1/20 の縮尺で行い、遺物出土状況図などは 1/10 の縮尺で行った。遺構写真は、35 mm のカラーリバーサルとデジタルカメラを使用した。



調査区位置図

第2図 発掘調査全体図

## 2 発掘調査の経過

発掘機材の搬入および調査対象区域内において調査区の設定を行い、発掘調査を開始する。なお、調査に関する作業はすべて人力で行った。調査区域は以前ブドウ園として使用されていたため、現地にはブドウの根が残されており、まずはブドウの根を抜く作業から着手した。抜根作業終了後、設定された調査区の表土除去作業に移行した。この耕作土である表土は 20～30 cmほどあり、遺物も頻繁に出土したため、作業はより慎重に行われた。表土除去作業が終了し、暗褐色土層および褐色土層が現れ、これらの土層内に遺構検出面が存在していた。遺構検出作業では、現在ではほぼ平坦に見える地形も旧地形は多少起伏があったことがわかるなど、人力作業により表土から掘り下げを行ってきた成果といえる。

遺構検出作業により判明した遺構のうち、整備対象となる縄文時代の住居址を主体に調査を実施した。住居址の調査は通常の調査同様、セクションベルトを設定してから掘り下げを行い、遺物は出土状況の記録をとってから取り上げを行った。セクションベルトは取り外したがピットや炉址に関しては半裁して記録をとるに留めた。

住居址完掘後は写真や平面図等の記録を取り、調査区周辺も含めた全景写真はラジコンヘリにより空中から撮影を行った。

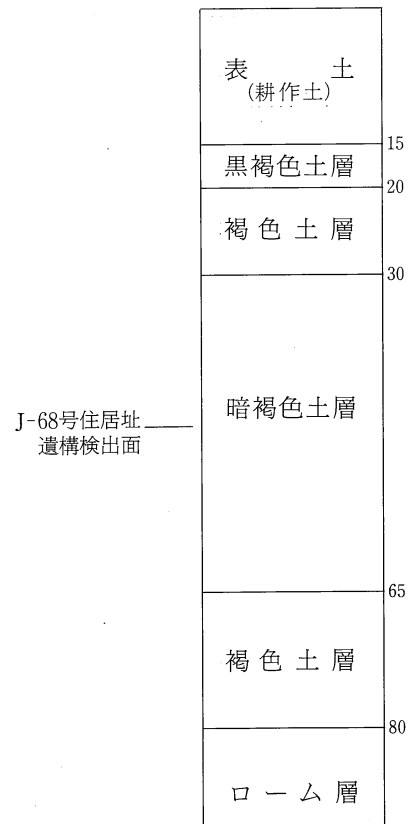
すべての調査を完了した時点で埋め戻しを行ったが、埋め戻しの際には遺構内に砂を入れ、遺構保護層を設けた。その後バックホーを使用して調査区内の埋め戻しを実施した。

## 3 遺跡の層序

発掘調査区域周辺は、現況ではほぼ平坦な印象を受けるが、旧地形では西側から東側に向けて緩やかな傾斜がみられ、若干の高低差をもちながら尾根状の微高地を形成している場所もあることが判明した。また、隣接する平成 14 年度調査でも確認されたように、南側を流れる渋川に向かうように東南方向に傾斜していることも確認された。よって現地表面からローム面までの高さは場所によって多少の相違がみられたが、基本層序は、表土（耕作土）→暗褐色土層→褐色土層（漸移層）→ローム層となり、耕作が浅い場所では部分的に暗褐色土層の上に黒褐色土層や褐色土層が薄く堆積しているのが確認された。

今回の史跡整備にともなった発掘調査では、遺構の掘り下げがどの面から行われているのか、当時の生活面がどの位置にあったのか把握することに努めた。調査を進めた結果、暗褐色土層から住居址の掘り込みが確認され、暗褐色土層内に生活面が存することが確認された。

このような成果にもとづき、史跡整備にあたっては当時の生活面を基準とし、保護のための盛土厚を算定することとした。



第3図 層序

## 4 調査概要

平成 16 年度調査地区は「縄文の村」集落復元地区にあたり、平成 14 年と 16 年の 2 カ年に分けて調査を実施した。

14 年度は 1,500 m<sup>2</sup>の範囲で調査が行われ、縄文時代として中期初頭から中期後葉にかけての住居址が 19 軒、中期中葉と考えられる立石が 2 基検出された。縄文時代以外では、平安時代の住居址が 1 軒検出されているだけで、当該地区が縄文時代中期を主体とした集落域であることが判明した。この調査結果から「縄文の村」の整備は、良好な状態の住居址が多数検出された縄文中期中葉の新道期の集落を対象に行うことが決定し、J-25・26・29 号住居址の 3 軒の住居址を復元することになった。

16 年度はこれらの状況を踏まえて、中期中葉とりわけ新道期の集落の様相を把握することを主たる目的として調査を実施することになった。

発掘調査は、より詳細な情報を得るために表土からすべて人力による掘り下げが行われた。調査を進めていくと調査区内には遺構検出面をさらに掘り下げた位置まで耕作が及んでいる個所があることが判り、遺構の痕跡がなくなっているのではないかと懸念されたが、幸いにも住居址の周壁の一部を壊すにとどまっていた。

この調査により、縄文時代では中期初頭Ⅱ（九兵衛尾根Ⅱ）期の住居址が 7 軒、中期中葉Ⅰ（貉沢）期の住居址が 2 軒、中期中葉Ⅱ（新道）期の住居址 8 軒、中期中葉Ⅲ（藤内Ⅰ）期の住居址 4 軒、中期中葉Ⅳ（藤内Ⅱ）期の住居址 2 軒、中期中葉Ⅴ（井戸尻Ⅰ）期の住居址 3 軒の合計 26 軒の住居址が検出された。また縄文中期中葉を中心にしたと考えられる土坑が 73 基検出されている。土坑の多くは、集落の中央広場と考えられる場所に多く分布しており、平成 14 年度の調査では確認することができなかった新たな成果といえる。またいくつかの土坑では、土坑上部に立つような状況で土器が埋められているものもあった。

今回の調査では、出土遺物として注目すべきものがいくつか発見されている。一つは J-47 号住居址から出土した有孔土製円板で、この土製円板の両面には抽象的な線刻が施されていた。有孔土製円板は後期以降に多くみられ、中期のものは少ないうえに、線刻があるものはより珍しい。もう一つは「の」字状石製品で、J-51 号住居址から出土している。「の」字状石製品は青森県から岡山県にかけての広い地域で発見されているが、これまでに全国で二十数例しか発見されていない。また遺物の時期としては縄文前期が中心で、今回の出土品のように中期中葉に属するものは数少ない。両者とも明確な用途なども不明で謎の多い遺物であり、今後注目されることであろう。

縄文時代以外の遺構では、弥生時代の壺形土器を利用した再葬墓 1 基が発見された。これまで平出遺跡からは、弥生時代の土器や石器などは出土しているが、住居址などの遺構は全くみつかっておらず、今回の再葬墓が平出遺跡から見つかった初めての弥生時代の遺構となった。このことにより、平出遺跡にも弥生時代の明確な痕跡があることが確認され、今後は住居址の発見が期待される。また、平安時代の住居址も 2 軒確認されている。

このように「縄文の村」地区の発掘調査では、縄文中期初頭から中葉を主体とした 45 軒の住居址が検出され、この場所が平出遺跡の中でも特に縄文中期前半の集落の中心地であったことが判った。



遺構一覽表

遺構名	所属時期	形態	規模 (m)	火処	主要出土遺物	備考
J-19号住	縄文中期初頭 (九兵衛尾根Ⅱ期)	(楕円)	5.5×不明	地床炉	土器、打製石斧、土偶	J-20号住に切られる 昭和61年に一部調査
J-20号住	縄文中期中葉 (新道期)	(楕円)	3.1×不明	埋甕炉	土器、打製石斧、敲石、台石	J-19号住を切る 昭和61年に一部調査
J-45号住	縄文中期中葉 (新道期)	円形	(4.7×4.5)	石囲炉	土器、打製石斧、磨石	J-46号住を切る
J-46号住	縄文中期初頭 (九兵衛尾根Ⅱ期)	円形	4.5×(4.5)	地床炉	土器、打製石斧	J-45号住に切られる
J-47号住	縄文中期中葉 (藤内Ⅰ期)	楕円形	5.9×4.8	石囲炉	有孔鏝付土器、打製石斧、石匙、凹石、敲石、剥片石器、有孔土製円板、土偶	J-50号住を切る
J-48号住	縄文中期中葉 (新道期)	楕円形	5.5×4.3	石囲炉	土器、打製石斧、石匙、敲石	J-49・50・54号住を切る
J-49号住	縄文中期初頭 (九兵衛尾根Ⅱ期)	不明	不明	不明	土器、打製石斧	J-48・51・54・55・56号住に切られる
J-50号住	縄文中期初頭 (九兵衛尾根Ⅱ期)	(不整形円形)	不明×4.3	地床炉	土器、打製石斧、剥片石器、凹石、土偶	J-47・48号住に切られる
J-51号住	縄文中期中葉 (新道期)	楕円形	(4.8)×4.3	埋甕炉・石囲炉	土器、「の」字状石製品、打製石斧、磨製石斧、石匙、石皿、磨石、凹石、土偶	J-49号住を切り、J-55・56号住に切られる
J-52号住	縄文中期中葉 (藤内Ⅰ期)	楕円形	5.8×5.1	石囲炉	土器、ミニチュア土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃、敲石、磨石、凹石、台石	J-53号住を切る
J-53号住	縄文中期中葉 (新道期)	楕円形	4.0×3.4	地床炉	土器、有孔鏝付土器、打製石斧、磨製石斧、石匙、磨石、凹石、敲石	J-52号住に切られる
J-54号住	縄文中期初頭 (九兵衛尾根Ⅱ期)	円形	5.6×5.4	地床炉	土器、打製石斧、台石、土偶	J-49号住を切り、J-48・55号住に切られる
J-55号住	縄文中期中葉 (井戸尻Ⅰ期)	円形	6.0×6.0	石囲炉	土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙、土偶、スプーン状土製品	J-49・51・54・56号住を切る
J-56号住	縄文中期中葉 (新道期)	円形	2.8×2.7	埋甕炉	土器、打製石斧、横刃形石器、凹石、敲石	J-49・51号住を切り、J-55号住に切られる
J-57号住	縄文中期中葉 (藤内Ⅰ期)	楕円形	5.1×4.6	不明	土器、打製石斧、磨製石斧、石匙、敲石、凹石、砥石、台石、土偶	
J-58号住	縄文中期初頭 (九兵衛尾根Ⅱ期)	楕円形	4.1×3.5	地床炉	土器、ミニチュア土器、打製石斧、凹石、土偶	
J-59号住	縄文中期中葉 (井戸尻Ⅰ期)	楕円形	3.6×3.3	埋甕炉	土器、打製石斧、磨製石斧	
J-60号住	縄文中期中葉 (藤内Ⅱ期)	楕円形	4.3×4.8	埋甕炉	土器、打製石斧、石匙、敲石、凹石	J-61号住に切られる
J-61号住	縄文中期中葉 (井戸尻Ⅰ期)	円形	6.6×6.9	石囲炉	土器、ミニチュア土器、打製石斧、石匙、敲石、凹石、砥石、蜂巢石、土偶	J-60号住を切る
J-62号住	縄文中期中葉 (藤内Ⅱ期)	楕円形	7.2×5.6	石囲炉	土器、ミニチュア土器、打製石斧、土偶	
J-63号住	縄文中期初頭 (九兵衛尾根Ⅱ期)	楕円形	6.2×(4.5)	地床炉	土器、打製石斧	J-64号住に切られる
J-64号住	縄文中期中葉 (猪沢期)	円形	4.6×4.5	埋甕炉	土器、打製石斧、磨製石斧、凹石、敲石、土偶	J-63号住を切る
J-65号住	縄文中期中葉 (新道期)	楕円形	4.5×3.7	埋甕炉	土器、打製石斧、磨製石斧、敲石、磨石、土偶	H-138号住に切られる
J-66号住	縄文中期中葉 (藤内Ⅰ期)	不明	不明	不明	土器、打製石斧、石皿	H-139号住に切られる
J-67号住	縄文中期中葉 (新道期)	円形	3.5×3.6	石囲炉	土器、打製石斧、土偶	J-19・68号住を切る 未完掘
J-68号住	縄文中期中葉 (猪沢期)	(円形)	(6.0×6.0)	石囲炉	土器、打製石斧	J-67号住に切られる 未完掘
再葬墓	弥生時代中期				弥生土器(壺・鉢)	未完掘
H-138号住	平安時代 (11世紀)	方形	6.3×5.6	カマド (北壁中央)	土師器杯、黒色土器椀、灰釉陶器小瓶、緑釉陶器	J-49号住に切られる
H-139号住	平安時代 (11世紀)	(方形)	不明×3.6	不明	土師器杯、砥石	J-66号住を切る 未完掘

## 5 遺構と遺物



J-19号住居址 (東側より)



J-20号住居址 (東側より)



J-19号住居址出土土器



J-20号住居址出土土器

### J-19号住居址 (第17図)

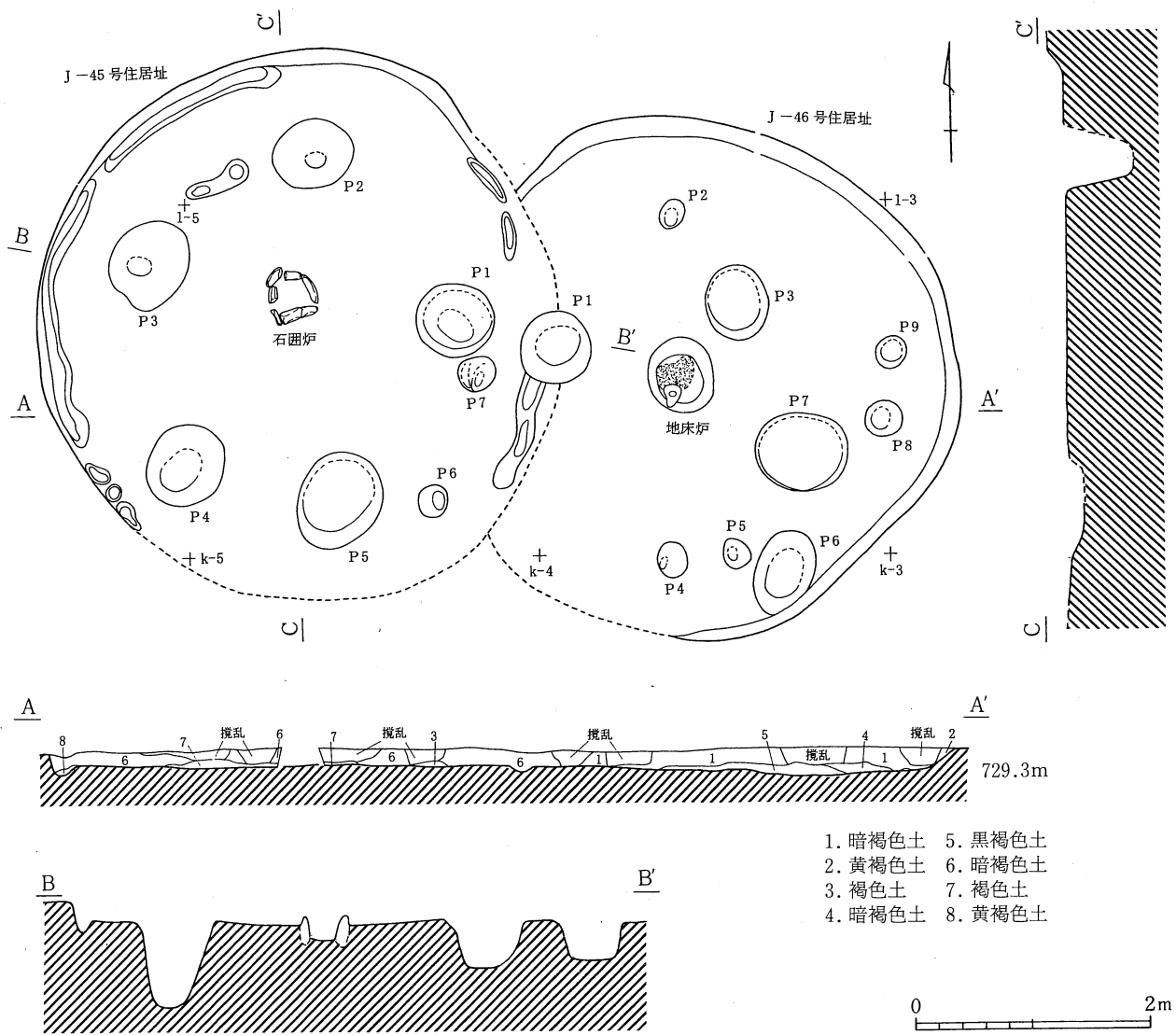
**遺構** 本址はe・f・g-12・13グリッドに位置する。規模は南端部をJ-20号住居址に切られているが、南北5.5mと確認できた。壁高は30cmを測り、周溝はない。中央付近に地床炉があり、P1~P3は支柱穴であろう。本址は出土遺物より縄文中期初頭Ⅱ(九兵衛尾根Ⅱ)期と考えられる。

**遺物** 土器は中期初頭Ⅱ期が主体で、石器では打製石斧がみられる。土偶1点と土製円板がある。

### J-20号住居址 (第17図)

**遺構** d・e-12・13グリッドに位置する。J-19号住居址上に貼床をして床面が構築されている。規模は、南北3.1mを測るが東西方向は未調査部分があり不明である。P1・P2は支柱穴と考えられ、住居址中央付近には埋甕炉がある。出土遺物から縄文中期中葉Ⅱ(新道)期と考えられる。

**遺物** 出土量はあまり多くないが、土器では中期中葉Ⅱ期が主体を占めている。石器では打製石斧、敲石、台石が出土している。



第4図 J-45・46号住居址

**J-45号住居址 (第4図)**

**遺構** j・k・1-3・4・5グリッドに位置し、J-46号住居址を切ってつくられている。南側が多少攪乱により破壊されているが、南北4.7m、東西4.5mの円形プランの住居であると推定される。耕作による攪乱が深くまで入っていたため周壁の残りは悪く、15cm程であった。周壁際には部分的に周溝がみられる。床面は平坦で部分的に踏みしめられており、目立った起伏などはない。住居中央やや北寄りには一辺45cmほどの方形の石囲炉があり、炉の底付近には焼土が堆積していた。住居内には7本のピットがあるが覆土の状況などからP1~P5の5本が支柱穴と考えられる。またP1とP5の間に位置するP6、P7は入口施設の一部として使用されていたものと考えられる。

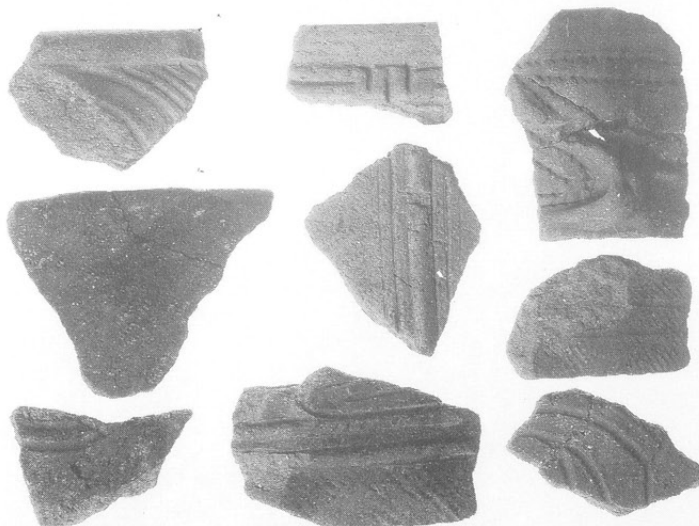
本址の時期は出土土器から縄文中期中葉Ⅱ(新道)期と考えられる。

**遺物** 上部に攪乱を受けていたこともあり、遺物の出土量はそれほど多くない。土器は中期初頭から中葉に比定されるものが出土しているが中期中葉Ⅱ期の割合が多く、平出三類A土器なども含まれている。石器では打製石斧、磨石が出土している。

J-45号住居址(手前)  
J-46号住居址(奥)  
(北側より)



J-45号住居址出土土器



J-46号住居址出土土器

#### J-46号住居址(第4図)

**遺構** 本址は、j・k・1-2・3・4 リッドに位置しており、J-45号住居址に西側を切られている。覆土は攪乱を受けている部分が多かったが、掘り下げた結果、南北、東西ともに4.5mの円形を呈するプランを確認できた。床面はやや凹凸があり、締まりもあまり良くない。遺構確認面までの壁高は15~20cmと低く、やや緩やかに立ち上がる。住居内からは9基のピットが検出され、支柱穴は4本でこのうち3本はP2、P4、P8と考えられるが、残りの一つは特定できなかった。さらにP4、P8についてはP5、P9に支柱穴を変えたことも考えられ、本址は建替えが行われた可能性もある。炉は床面を10cmほど掘り込んだ地床炉で、炉内からは焼土も検出された。炉内にさらに深さ10cmほどの穴が掘り込まれている。本址の覆土最下層は炭化材を多量に含み、焼土もみられたことから焼失住居の可能性も考えられるだろう。

本址は出土遺物から、縄文時代中期初頭Ⅱ(九兵衛尾根Ⅱ)期の住居と考えられる。

**遺物** 遺物の出土は中期初頭から中葉にかけての土器、打製石斧と非常に少ない。



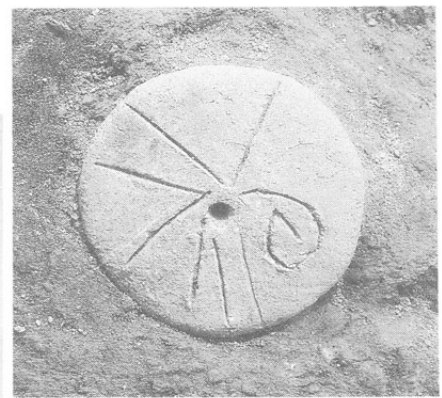
J-47号住居址(南側より)



J-47号住居址遺物出土状況



J-47号住居址出土土器



有孔土製円板出土状況

### J-47号住居址(第5図)

**遺構** 調査区北東の i・j-2・3 グリッドに位置している住居址で、J-50号住居址の北側を切っている。遺構範囲を確認した後、東西、南北にベルトを設定し、さらに調査を進め、最終的に南北 5.9m、東西 4.8mの楕円形プランを呈す住居が検出できた。床面は堅緻で、起伏は少ない。遺構確認面までの壁高は最大 30 cmを測り、垂直に近い立ち上がりをしている。住居内からは大小 16 基のピットが検出され、このうち P1~P3、P6、P10、P15 が支柱穴であると推定される。住居内中央から石囲炉が北側に炉石をわずかに残し、焼土を伴った状態で検出された。出土遺物から本址は縄文時代中期中葉Ⅲ(藤内Ⅰ)期の住居と考えられる。

**遺物** 吹上パターンを呈した本址からは多くの遺物が出土しており、台付の有孔鏝付土器や表裏両面に抽象的な線刻が施された有孔土製円盤といった非常に珍しい遺物もみつまっている。そのほかに土偶が 8 点と比較的多く出土しているのも注目できる。石器は打製石斧、石匙、敲石、凹石、剥片石器、台石など多種にわたる。





J-49号住居址(中央、南側より)



J-49号住居址出土土器



J-50号住居址(奥、北側より)



J-50号住居址出土土器

### J-49号住居址(第5図)

**遺構** g・h-3・4・5グリッドに位置している。J-48・51・54・55・56号住居址に切られている。よって残存状況は悪く、プランおよび規模は不明である。わずかに残った周壁の壁高は10cmほどで周溝はなく、良く締まった床面からはピットが5本検出されているが、支柱穴と断定できるものはなかった。本址の時期は、出土土器から縄文中期初頭Ⅱ(九兵衛尾根Ⅱ)期と考えられる。

**遺物** 出土量は非常に少なく、土器では中期中葉Ⅱ期が主に出土している。石器は打製石斧がある。

### J-50号住居址(第5図)

**遺構** h・i-2・3グリッドに位置している。J-47・48号住居址に切られており、東西4.3mを測る。壁高は15~20cmと浅く、周溝はない。中央部には地床炉がみられる。ピットは8本みられるが、支柱穴の特定は困難である。本址の時期は、出土土器から縄文中期初頭Ⅱ(九兵衛尾根Ⅱ)期であろう。

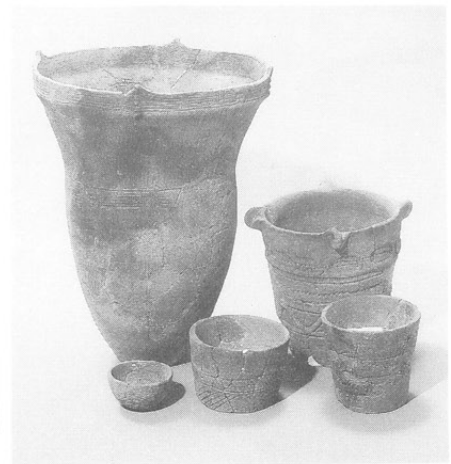
**遺物** 出土土器は中期初頭Ⅱ期が主体的で、東海系の土器もみられる。石器では打製石斧、剥片石器、凹石が出土している。土偶が14点も出土しており注目される。



J-51号住居址  
(手前、南側より)



J-51号住居址遺物出土状況(東側より)



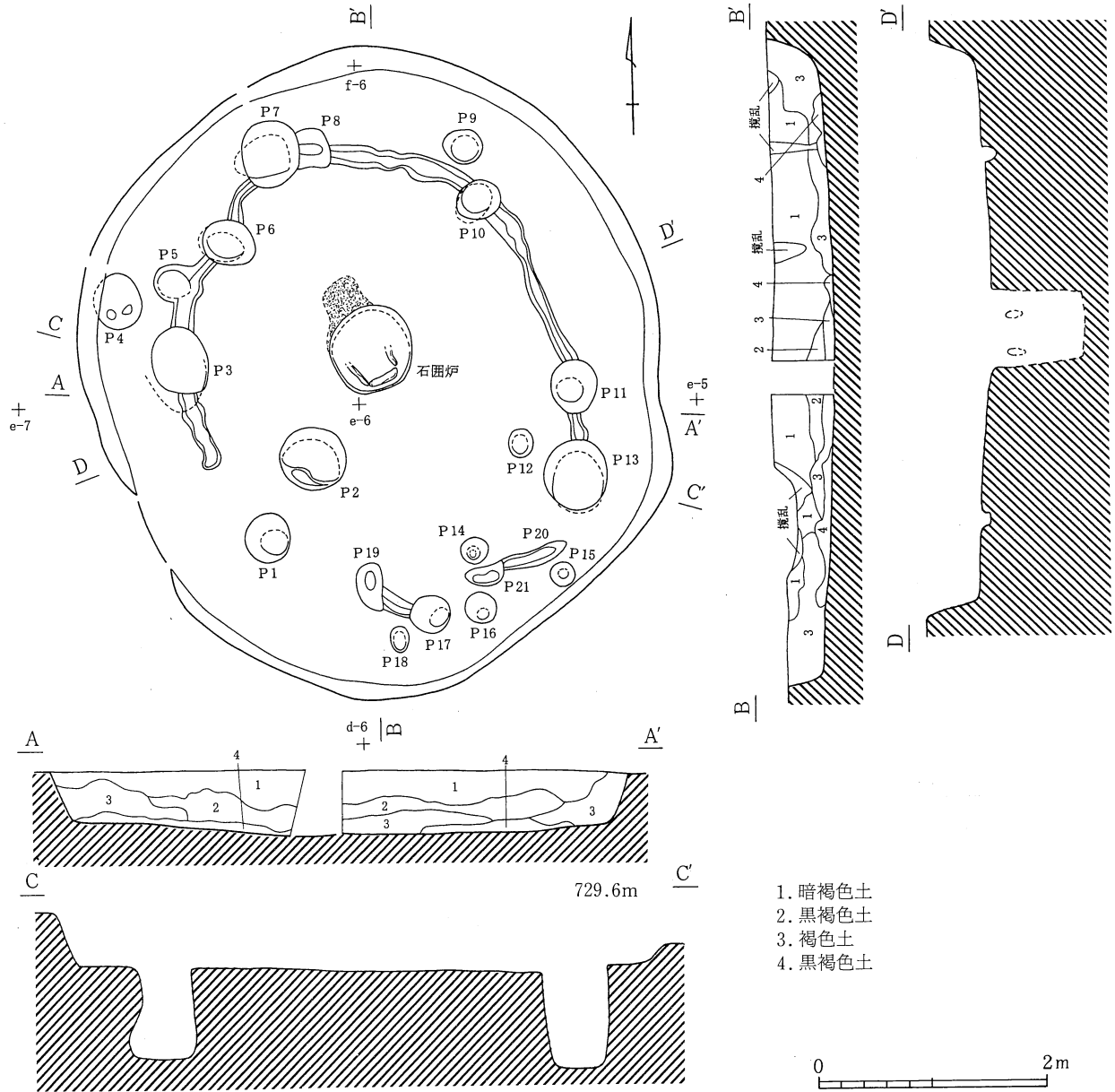
J-51号住居址出土土器

### J-51号住居址(第5図)

**遺構** 本址はf・g-4・5グリッドに位置している。J-49号住居址を切り、J-55・56号住居址に切られているため北壁は残されていないが、南北約4.8mと推測される。東西は4.3mを測り、プランは楕円形を呈する。壁高は35cmを測り、周溝はない。炉は住居中央付近にみられ、埋甕炉を壊して石囲炉が築かれている。このことから住居改築が行なわれたことがわかる。柱穴は12本あり、P2・P3・P8・P10・P11の5本が支柱穴と考えられる。時期は出土土器から縄文中期中葉Ⅱ(新道)期であろう。

**遺物** 注目されるものとして「の」字状石製品がある。全国的にも出土例が限られ、謎の多い遺物だけに今後大いに注目されるであろう。出土土器は中期中葉Ⅱ期が主体を占めている。石器も多く、打製石斧、磨製石斧、石匙、石皿、磨石、凹石、敲石が出土している。土偶も2点出土している。





第6図 J-52号住居址

J-52号住居址 (第6図)

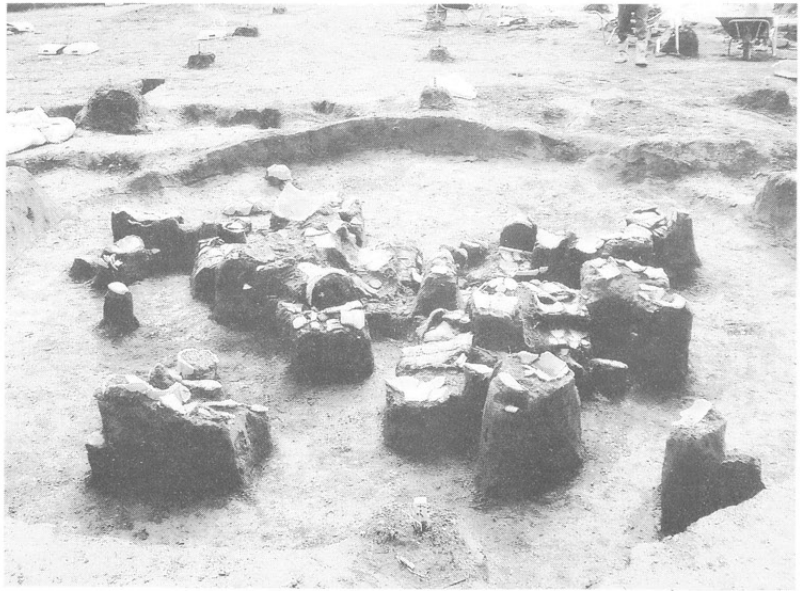
**遺構** d・e-5・6 グリッドに位置している。覆土からの遺物の出土が著しく、掘り下げには苦慮したが、最終的に南北5.8m、東西5.1mの楕円形のプランが確認された。他の住居址との切り合い関係は無く、比較的良好な状態であった。床は平坦、堅緻で、遺構確認面までの壁高は35~45cmで、急に立ち上がる。壁から70~80cm内側にいくつかのピットを結びつけるように溝が巡っているが、性格については不明である。支柱穴はP1、P3、P8、P10、P11、P14の6本が考えられる。住居址中央からは焼土を伴った直径70cmのピットが確認され、15cmほど掘り下げると中から石囲炉が検出された。本址の時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉Ⅲ(藤内Ⅰ)期の住居と考えられる。

**遺物** 典型的な吹上パターンを呈する住居址で、暗褐色の覆土中から多量の遺物が出土している。土器は中期中葉(藤内Ⅰ期)のものが多くまとまって出土しているほか焼町土器もみついている。そのほかにミニチュア土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃、敲石、磨石、凹石、台石などが出土している。

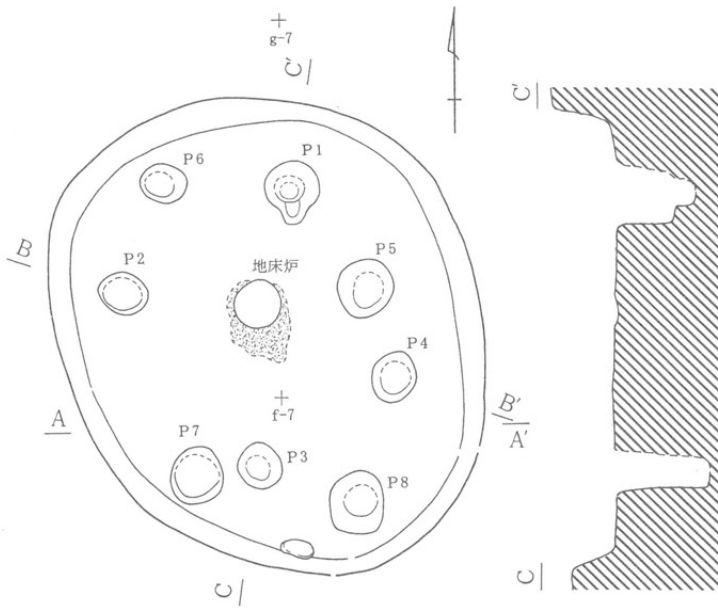


J-52号住居址（東側より）

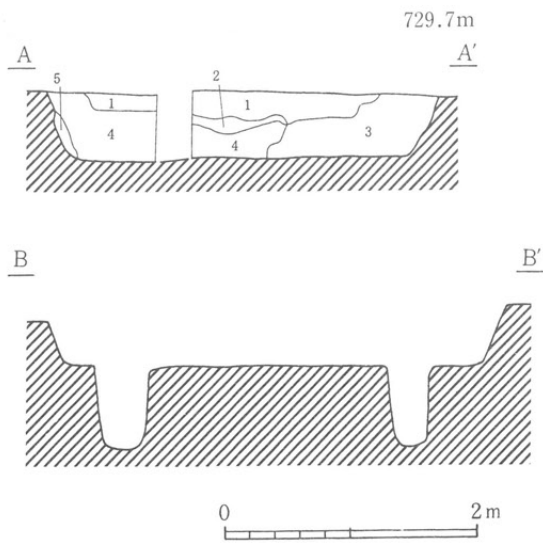
J-52号住居址遺物出土状況（北側より）



J-52号住居址出土土器



J-53号住居址(南側より)



J-53号住居址出土土器

1. 暗褐色土
2. 黒褐色土
3. 褐色土
4. 褐色土
5. 明褐色土

第7図 J-53号住居址

### J-53号住居址 (第7図)

**遺構** e・f-6・7グリッドに位置している。J-52号住居址に南壁の一部をわずかに切られているが南北4.0m、東西3.4mの楕円形プランを呈する。最大壁高は50cmを測り、周溝はみられない。床面は大きな起伏もなく平坦で非常に堅緻である。住居中央には地床炉があり、炉の周囲には広く焼土がみられる。ピットは8本あり、その内のP1・P2・P3・P4の4本が支柱穴である。

注目すべき点として、覆土中には焼土の広がりが見られ、その中からは周囲に網代痕が残された直径20cmほどの、熱を受けた形跡のある粘土塊が出土していることがあげられる。このことから、土器や土製品などを焼成した場であった可能性もあり、今後検討の余地があろう。

時期は出土土器から縄文中期中葉Ⅱ(新道)期である。

**遺物** 中期中葉Ⅱ期の土器が主体的に出土しており、抽象的なモチーフを描いた土器や有孔鏝付土器もみられる。石器は打製石斧、磨製石斧、石匙、磨石、凹石、敲石が出土している。



J-54号住居址  
(北側より)



J-54号住居址出土土器

### J-54号住居址 (第5図)

**遺構** 本址はh・i・j-4・5グリッドに位置している。J-49号住居址を切り、J-48・55号住居址に切られている。南北5.6m、東西5.4mの円形プランの住居である。周壁はローム層に深く掘り込まれており、壁高は50cmを測る。東側の一部には周溝がみられるが、その他の部分には見当たらない。6本のピットがあり、P1・P3・P4・P5の4本が支柱穴であろう。床面は平坦で良く踏みしめられており、住居中央には地床炉があるが、住居内のその他の場所にも掘り込みはみられないが焼土が広範囲に広がっている。

時期は出土土器からみて、縄文中期初頭Ⅱ(九兵衛尾根Ⅱ)期である。

**遺物** 出土量はあまり多くないが、中期初頭から中葉の土器が出土している。主体となる時期は中期初頭Ⅱ期である。石器では打製石斧と台石がある。土偶頭部が1点出土している。



J-55号住居址  
(中央左、西側より)



J-55号住居址出土土器

### J-55号住居址 (第5図)

**遺構** 調査区中央に位置する住居址で、J-49・51・54・56号住居址を切っている。暗褐色土層の検出面から掘り下げた結果、南北、東西ともに6.0mの円形を呈するプランを検出した。床面は平坦で堅く締まっている。遺構確認面までの壁高は40cmを測り、急に立ち上がる。住居内からは17基のピットが検出されたが、このうちP1、P7、P11、P17の4本が主柱穴であろうか。J-54号住居址との境付近に土坑1基が確認されたが、検出状況などから考えて本址に伴うものではないと思われる。炉は石囲炉で住居内中央の床を大きく掘り込んでいる。南側の炉石だけが残されており、そのほかは抜き取ったと思われる。本址の時期は出土遺物から縄文時代中期中葉V（井戸尻I）期と推定される。

**遺物** 中期中葉（井戸尻I期）の土器が比較的まとまって出土している。土製品は土偶とスプーン状土製品がみついている。土偶の内訳は頭1、胴2、足1で、足はJ-47号住居址から出土した土偶の胴部と接合した。石器は打製石斧が多いが、磨製石斧、石鏃、石匙、敲石、凹石、台石も出土している。



J-56号住居址(北側より)



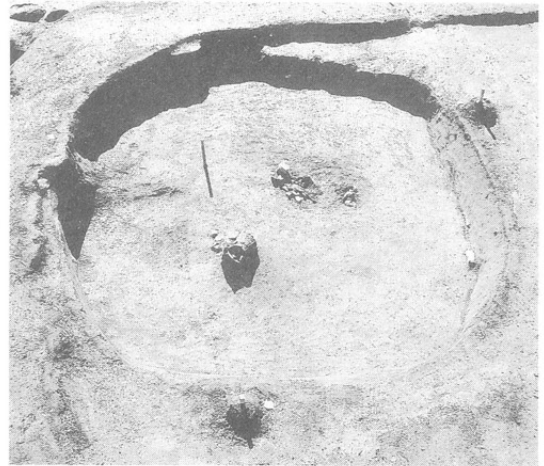
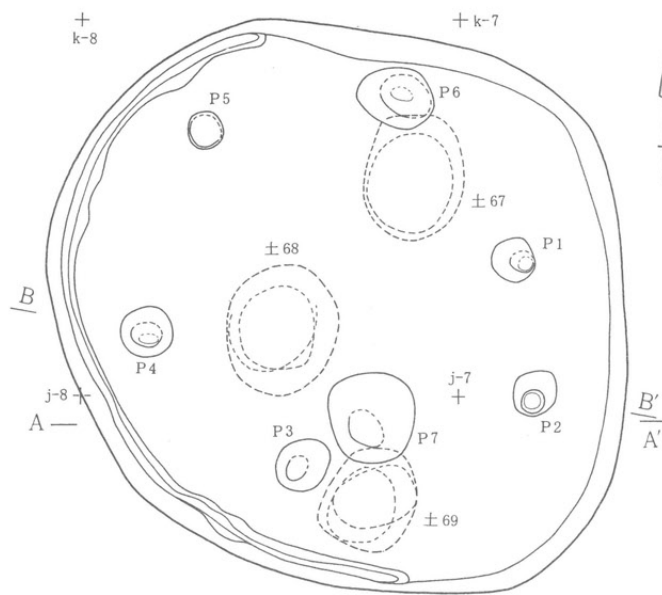
J-56号住居址出土土器

### J-56号住居址(第5図)

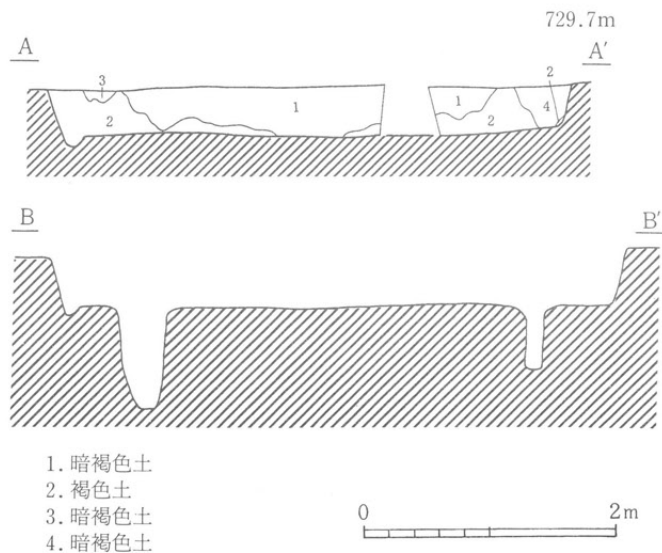
**遺構** 本址はg・h-5グリッドに位置している。今回検出された住居址の中で最も小さな住居址である。J-49・51号住居址を切り、J-55号住居址に切られている。このように切り合いが激しく、大部分が破壊されているため周壁の残りは良くないが、残されている東壁では壁高30cmを測る。住居址のプランおよび規模は、周溝が住居をほぼ全周するように残されていたため、南北2.8m、東西2.7mの円形プランを呈していると判明した。床面は起伏も少なく平坦で、よく踏みしめられている。住居中央には埋甕炉がみられ、炉体土器には直径15cmほどの小形の土器が使用されていた。本址のものと考えられるピットは3本あり、このうちP1・P2の2本が支柱穴と考えられる。このことから棟持柱構造の住居であったことが想定された。

時期は出土土器などから縄文中期中葉Ⅱ(新道)期である。

**遺物** 住居が小形である上に切り合いが激しく、遺物出土量は多くない。土器は中期中葉のものがほとんどで、主体となる時期は中期中葉Ⅱ期である。比較的小さな破片が多いが、床面付近から半完形の土器も出土している。石器では打製石斧、横刃形石器、凹石、敲石が出土している。



J-57号住居址(北側より)



- 1. 暗褐色土
- 2. 褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗褐色土



J-57号住居址出土土器

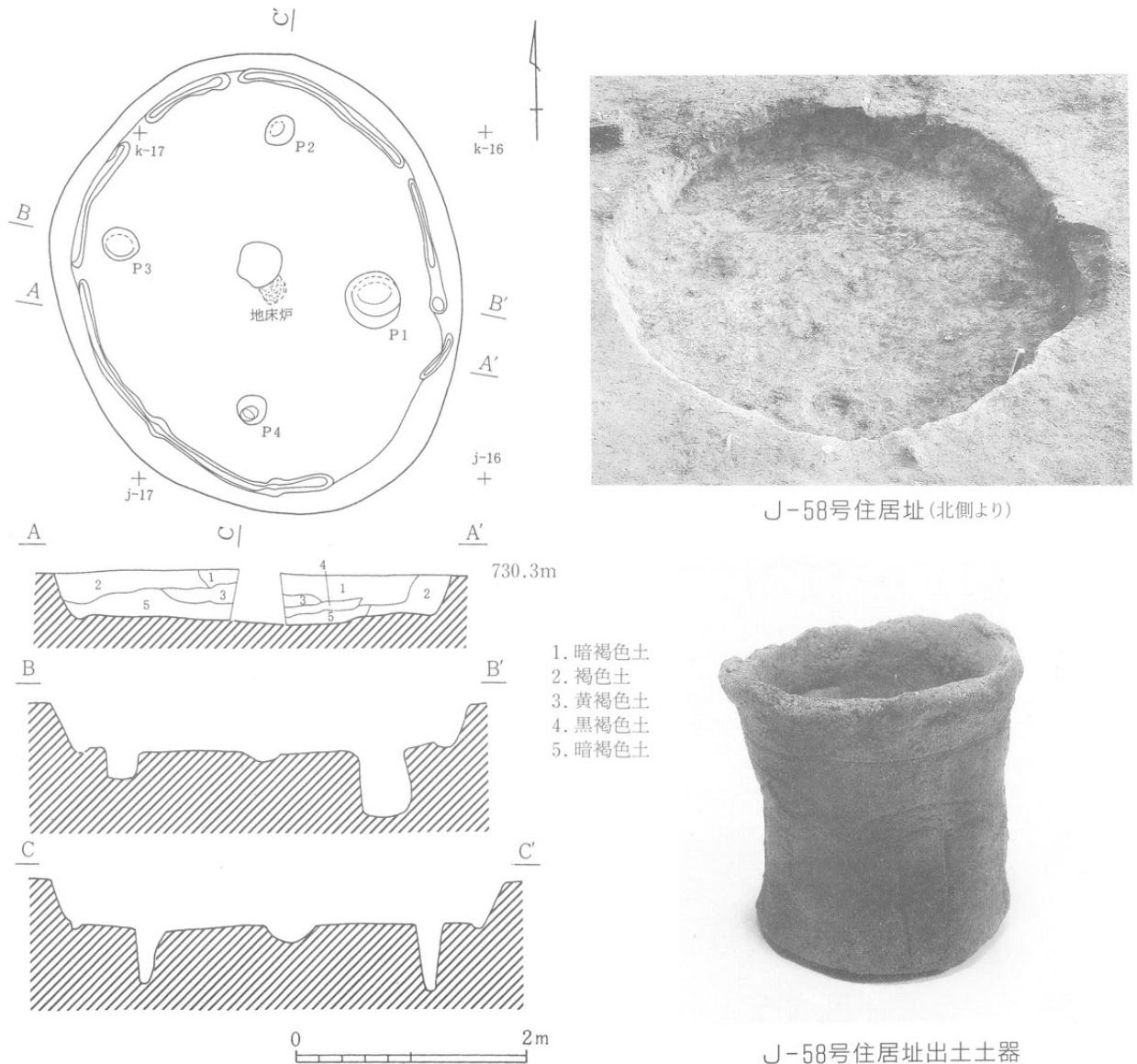
第8図 J-57号住居址

### J-57号住居址 (第8図)

**遺構** 本址は i・J-6・7 グリッドに位置している。耕作土を取り除いた後、掘り下げを行った。その結果、暗褐色土層中に住居址の輪郭が検出された。遺構範囲の確認後、ベルトを設定し調査を進めていった結果、南北 5.1m、東西 4.6m の楕円形プランを呈す住居が検出できた。床面は平坦で堅く、遺構確認面までの壁高は最高 50 cm と高く、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁から南壁にかけて幅、深さともに 10 cm ほどの周溝が巡っている。住居内からはピット 7 基と土坑 3 基確認された。このうち P1~P6 が支柱穴と推定される。土坑はいずれも幅 70~100 cm、深さ 70~90 cm と大きい。検出された状況等を考えると本址との関係は薄いと思われる。炉は確認できず、焼土なども検出されなかった。

住居の時期は出土遺物により、縄文時代中期中葉Ⅲ(藤内Ⅰ)期の住居と推定される。

**遺物** 遺物の量はそれほど多くない。中期中葉(藤内Ⅰ)期の土器や土偶が 2 点出土している。石器は打製石斧、磨製石斧、石匙、敲石、凹石、砥石、台石と豊富である。



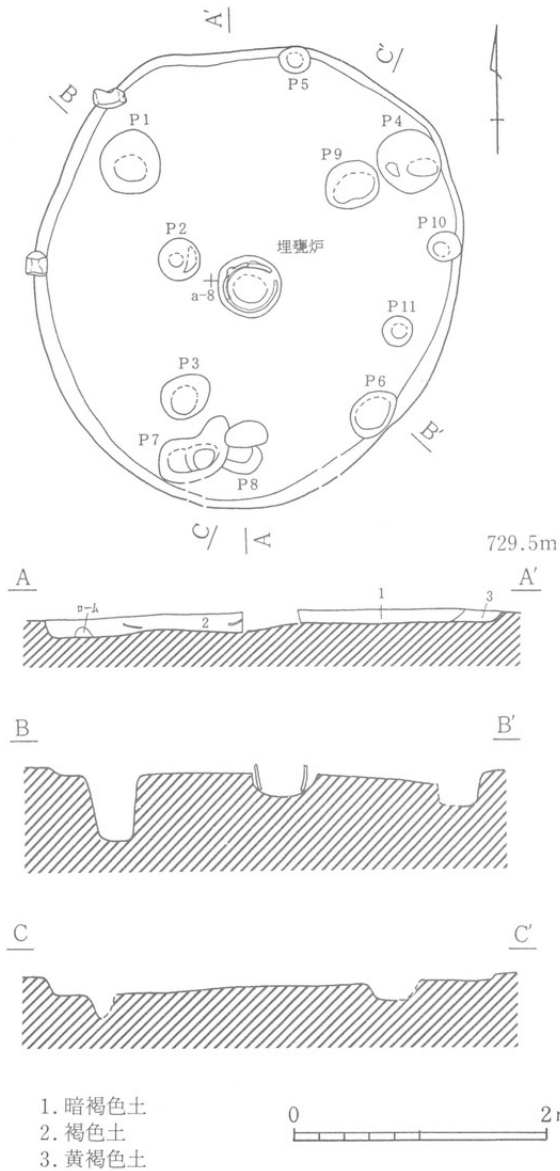
第9図 J-58号住居址

### J-58号住居址 (9図)

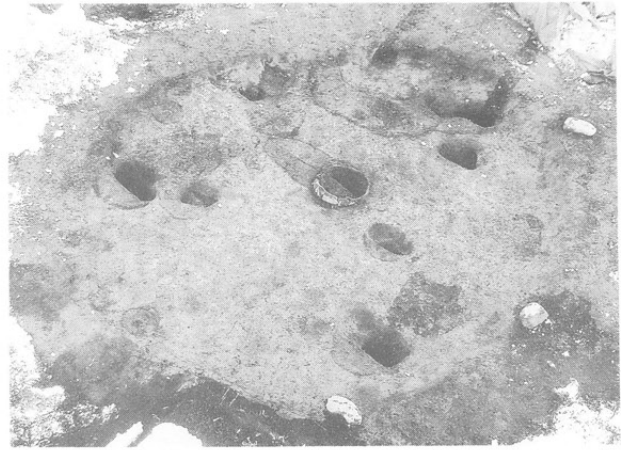
**遺構** 本址は調査区西の j・k-16・17 グリッド上にあり、他の住居址とは少し離れた場所に位置している。耕作土を除去し掘り下げを進めていくと、やがて、暗褐色土層中にやや色調の異なる住居址の輪郭が現れた。東西、南北にベルトを設定し、さらなる掘り下げを行った結果、最終的に南北4.1m、東西3.5mの楕円形を呈す小さな住居址プランが確認できた。床面はやや起伏があるが、締まっている。遺構確認面からの壁の高さは35~40cmで、立ち上がりは急である。壁下には南東を除いて周溝が巡っており、幅は約10cm、深さは1~5cmと浅い。住居内から主柱穴と思われるP1~P4の4基のピットが検出された。炉は床をわずかに掘り込んだ地床炉が住居中央部に設けられ、その南側には焼土の広がりが見られる。出土遺物から考えられた本址の時期は、縄文時代中期初頭Ⅱ(九兵衛尾根Ⅱ)期である。

**遺物** 遺物は非常に少なく、中期初頭(九兵衛尾根Ⅱ期)を主とした土器がわずかにみついている。土製品では土偶が4点と比較的多くみついているほか、ミニチュア土器も出土している。石器は打製石斧と凹石がみついている。





第10図 J-59号住居址



J-59号住居址(北側より)

J-59号  
住居址出土土器



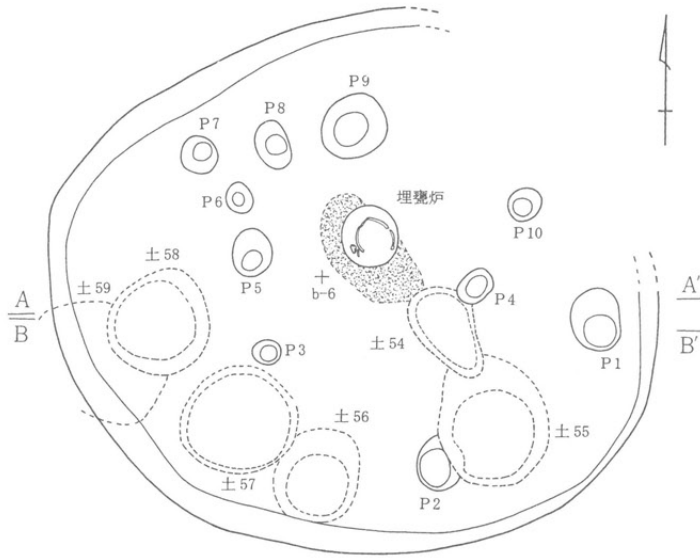
J-59号住居址出土土器

### J-59号住居址(第10図)

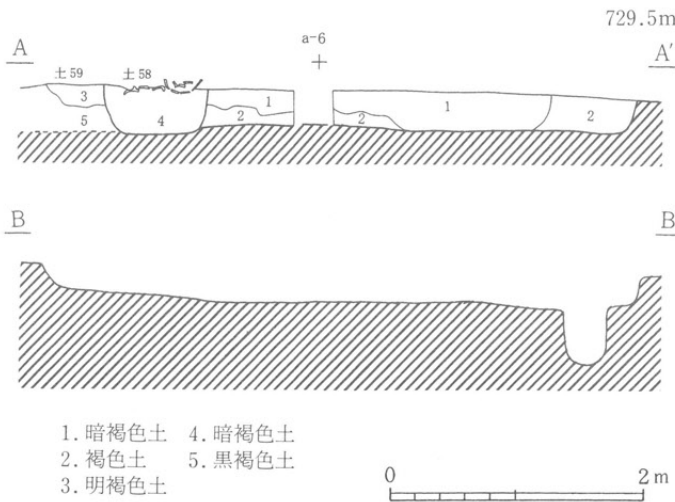
**遺構** 本址はaa・a-7・8グリッドに位置している。本址は地表面から比較的浅い位置に築かれていたため、床近くまで耕作が及んでおり、確認された壁高は約10cmと浅い掘り込みであった。周壁際に周溝は確認されなかった。床面は平坦であるが、中央付近に部分的に踏み固められた床が残されていただけで、全体的に軟質な床面をしていた印象を受けた。炉は住居中央に埋壺炉がみられ、直径40cmほどの比較的大きな土器が炉体土器として使用されていた。住居内からはピットが11本検出され、このうちP1・P3・P4・P6・P7などが支柱穴の可能性があると考えられるが、掘り込みの深さや覆土等に統一性がなく、断定はするのは難しい。

時期は出土土器や炉体土器などから縄文中期中葉V(井戸尻I)期であろう。

**遺物** 住居の覆土自体が浅く、遺物出土量も多くないが、中期中葉V期の土器が主体的に出土している。石器では打製石斧、磨製石斧が出土している。



J-60号住居址 (北側より)



J-60号住居址出土土器

第11図 J-60号住居址

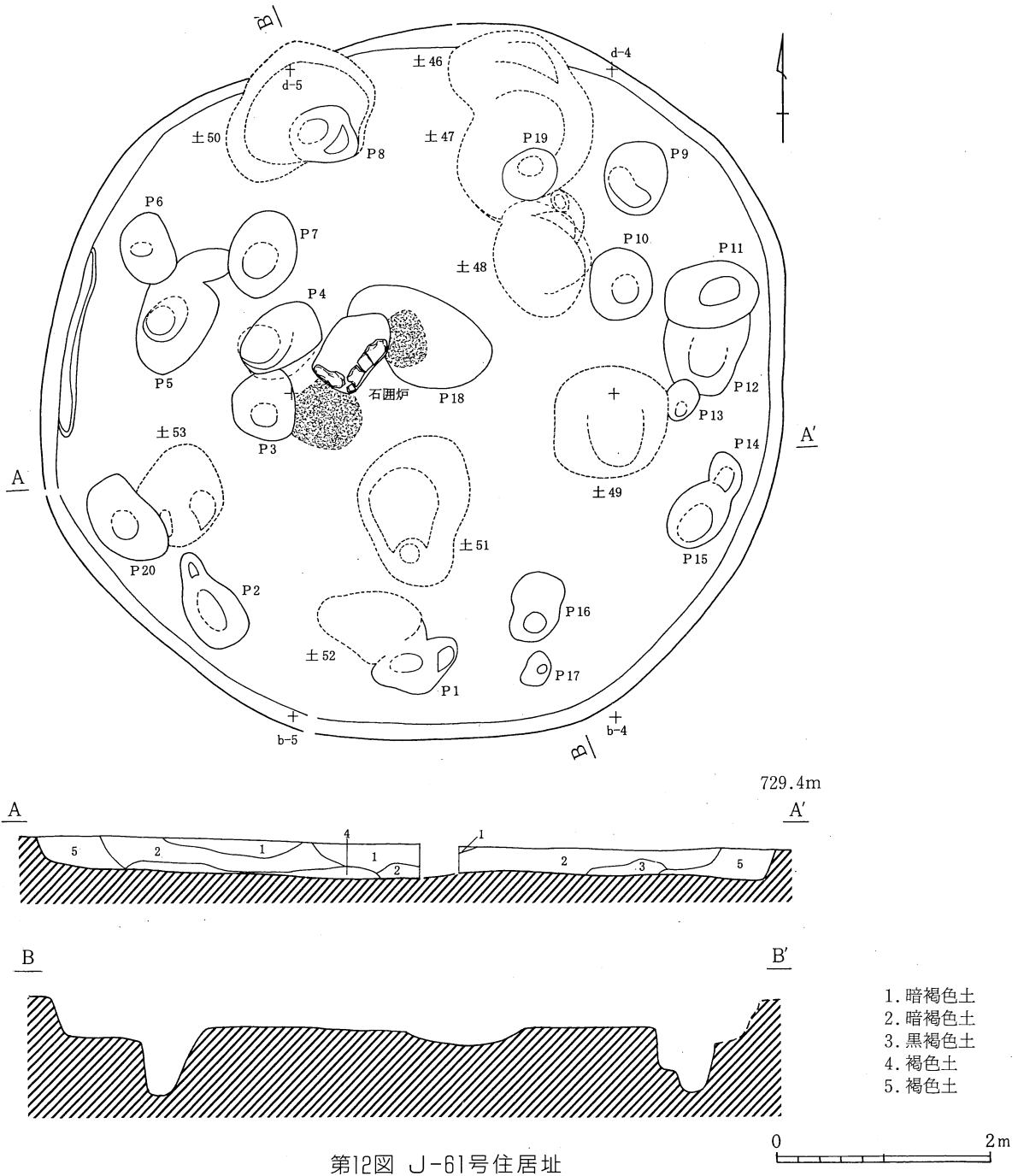
### J-60号住居址 (第11図)

**遺構** a・b-5・6 グリッドに位置する住居址で、北東部をわずかに J-61号住居址に切られている。

耕作土を取り除いた後、掘り下げを行った。その結果、暗褐色土層中から住居址の輪郭が検出された。遺構範囲の確認後、ベルトを設定し調査を進めていった結果、南北4.3m、東西4.8mの楕円形プランを呈す住居が検出できた。床は平坦で堅く締まり、壁高は約15~25cmと浅く、ほぼ垂直に立ち上がる。住居内からはピット10基が確認されたが、このうちP1、P2、P3、P5、P9、P10が支柱穴と推定される。そのほかに6基の土坑が住居内に掘られていた。土坑は直径70~90cm、深さ10~15cmを測り住居の南側に集中している。大きさや位置から考えて本址との関係は薄いと思われる。住居中央からは埋甕炉が検出され、周辺からは焼土もみつかった。

住居の時期は出土遺物および炉体土器により、縄文時代中期中葉IV(藤内II)期の住居と推定される。

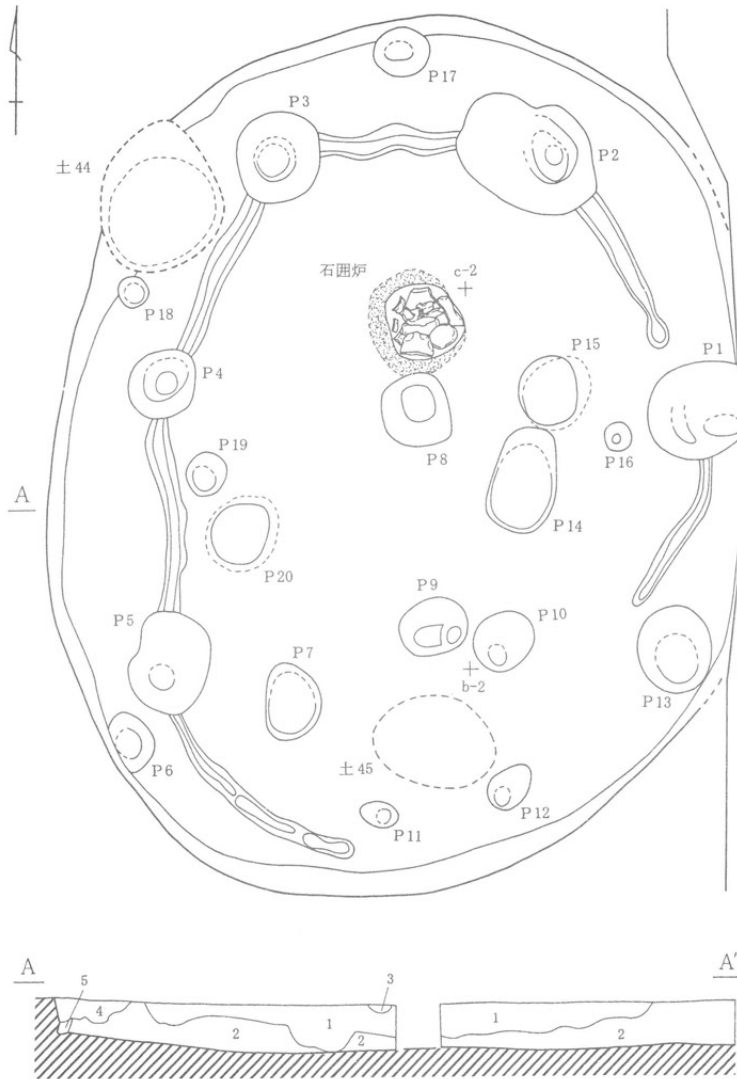
**遺物** 遺物の少ない住居址であるが、埋甕炉の炉体土器には中期中葉II期の土器が使われていた。石器は打製石斧、凹石、石匙が出土している。



第12図 J-61号住居址

### J-61号住居址 (第12図)

**遺構** 本址は調査区南 b・C-3・4・5 グリッド上に位置し、J-60号の北東部をわずかに切っている。表土を掘り下げていくと、暗褐色土層中にやや色調の異なる大きな住居址の輪郭が検出された。東西、南北にベルトを設定し、さらに掘り下げて調査を進めていった。最終的に南北6.6m、東西6.9mのほぼ円形を呈す、大形の住居址プランが検出できたが、住居の床面には無数のピットや大きな土坑が存在し、良好な状態で残されている床の部分が少ないほどであった。床面は起伏もあり、縮まりはあまり良くない。住居内中央やや西寄りに石囲炉があったが、炉石の一部がなくなっていた。炉の東側と南側の2ヶ所に焼土の広がりがあり、住居内から20基ものピットが検出されていることから、本址は建替えが行わ



J-62号住居址出土土器



J-62号住居址(南側より)

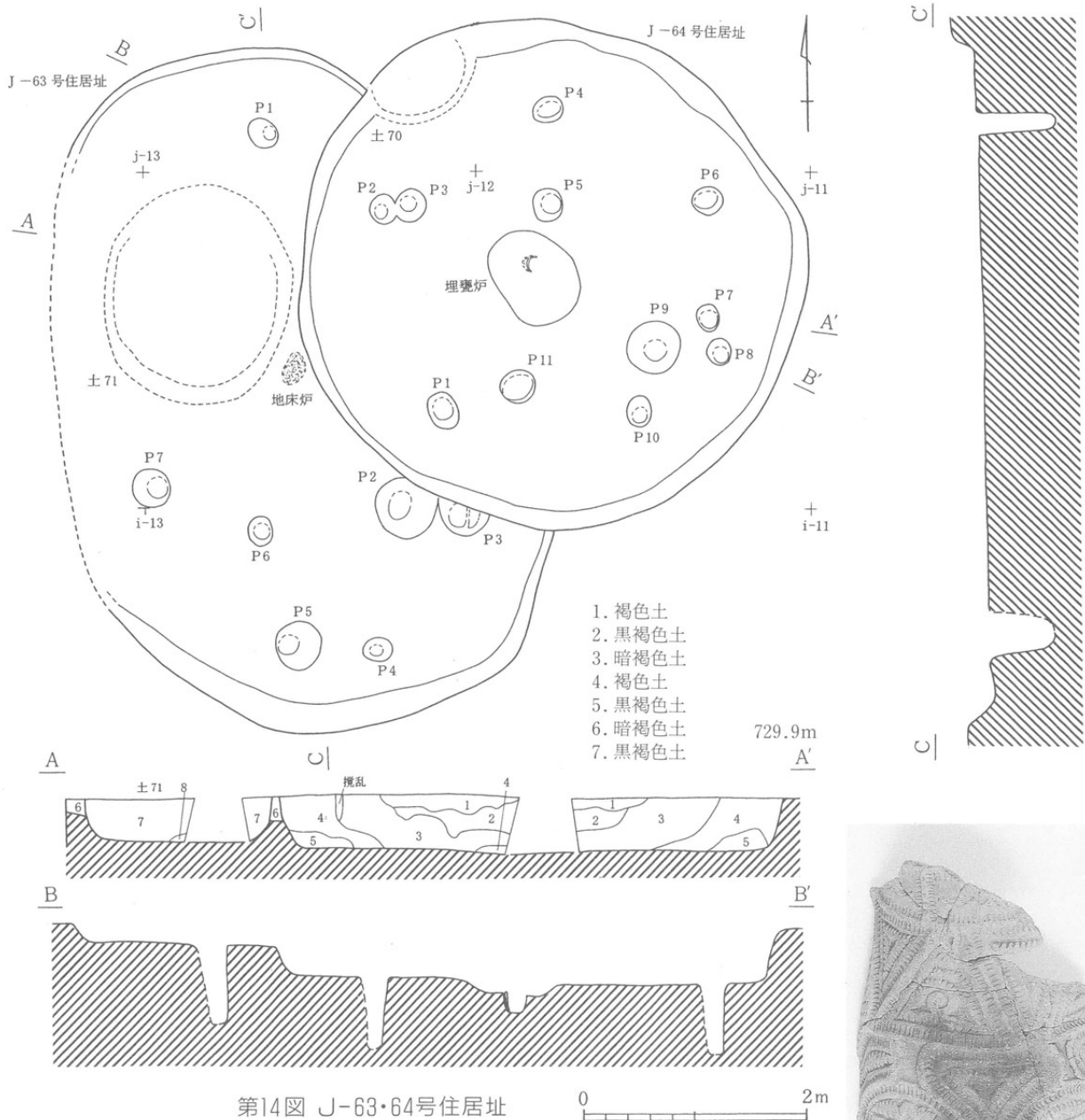
第13図 J-62号住居址

### J-62号住居址 (第13図)

**遺構** a・b・C-1・2 グリッドに位置している。南北7.2m、東西5.6mの大形の楕円形プランを呈し、床面は平坦で、堅く締まっている。遺構確認面までの壁高は最大40cmで、立ち上がりは急である。

住居内には、J-52号住居址でもみられた、ピットを連結する溝が巡っている。この溝の用途や性格などについては今後検討の余地があろう。支柱穴は溝上にあるP1～P5およびP11、P13、P17が該当すると思われる。中央やや北寄りに、石が詰まり周辺に焼土を伴う掘り込みが検出されたが、石の出土状況などから考えると、これは当時石囲炉であったものが人為的に壊され、炉石が掘り込みの中に詰められた状態となったのではないかと考えられる。石囲炉のすぐ南にはP8があり、地床炉も設けられていた可能性もある。住居の時期は出土遺物により、縄文時代中期中葉IV(藤内II)期の住居と推定される。

**遺物** 中期中葉(藤内II期～井戸尻I期)の土器がみついているほか、土偶が2点、ミニチュア土器、打製石斧がみついているのみである。

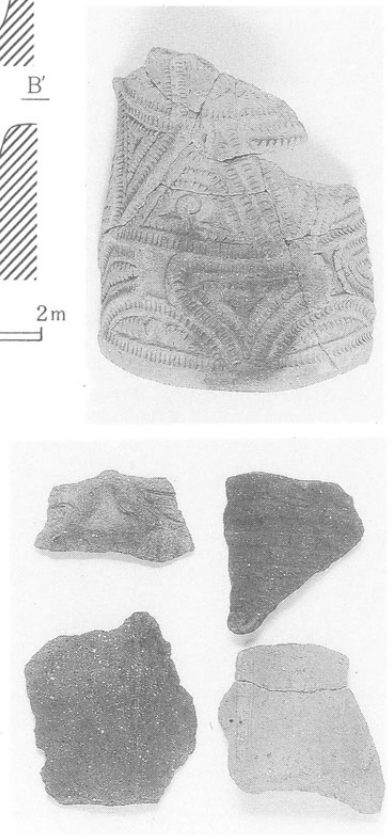


**J-63号住居址 (第14図)**

**遺構** h・i・j-11・12・13グリッドに位置している。J-64号住居址と71号土坑に切られている。東西規模は残された住居プランなどから、東西4.5mほどと推定される。南北は6.2mを測り、楕円形プランと考えられる。検出面からの掘り込みは10~15cmと浅く、周溝も認められなかった。床面は平坦で踏みしめられていたが、周壁に近い場所は柔らかさみであった。中央には地床炉が残され、ピットが7本あるが、P1、P5、P7が支柱穴として使われていたと考えられる。

出土土器から縄文中期初頭Ⅱ(九兵衛尾根Ⅱ)期であろう。

**遺物** 遺物の出土量は少ないが、土器は中期初頭Ⅱ期のが主体である。石器では打製石斧がみられる。



J-63号住居址出土土器

J-63号(右)・64号(左)  
住居址(北側より)



J-64号住居址出土土器



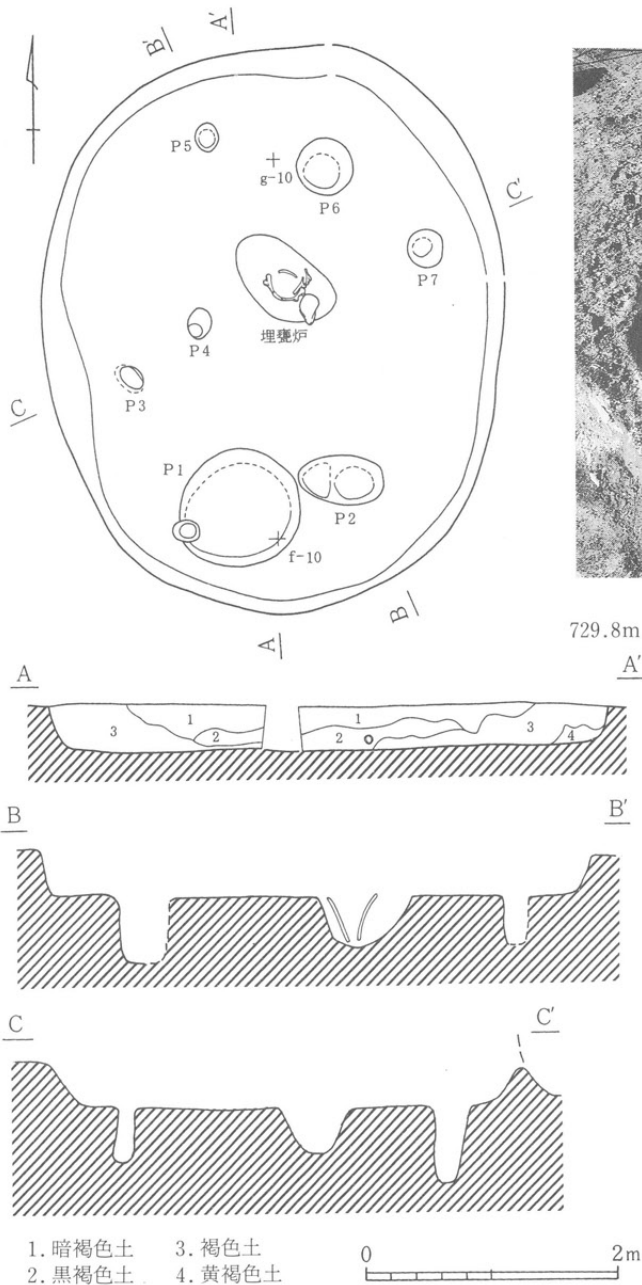
J-64号住居址出土土器

### J-64号住居址 (第14図)

**遺構** h・i・j-11・12 グリッドに位置しており、J-63号住居址を切っている。南北4.6m、東西4.5mの円形プランの住居である。周壁はローム層にしっかりと掘り込まれてつくられており、壁高は40cm以上と高く、切り合っているJ-63号住居址の床面とは20cm以上の差がみられた。周溝はみられなかった。床面は平坦でよく踏み固められていた。炉は中央に埋甕炉があり、炉体土器には直径15cmほどの小形の土器が正位に埋められて使用されていた。ピットは11本あり、P1・P2・P4・P6・P8・P10が支柱穴として考えられる。

時期は炉体土器や出土土器から縄文中期中葉I（貉沢）期と考えられる。

**遺物** 中期初頭から中葉の土器が出土しているが、主体となるのは中期中葉I期である。特筆すべきものとして、フクロウをモチーフとしたと思われる土器片が出土しており、大変興味深い。石器では打製石斧、磨製石斧、凹石、敲石が出土している。土偶も3点出土している。



J-65号住居址(南側より)



J-65号住居址出土土器

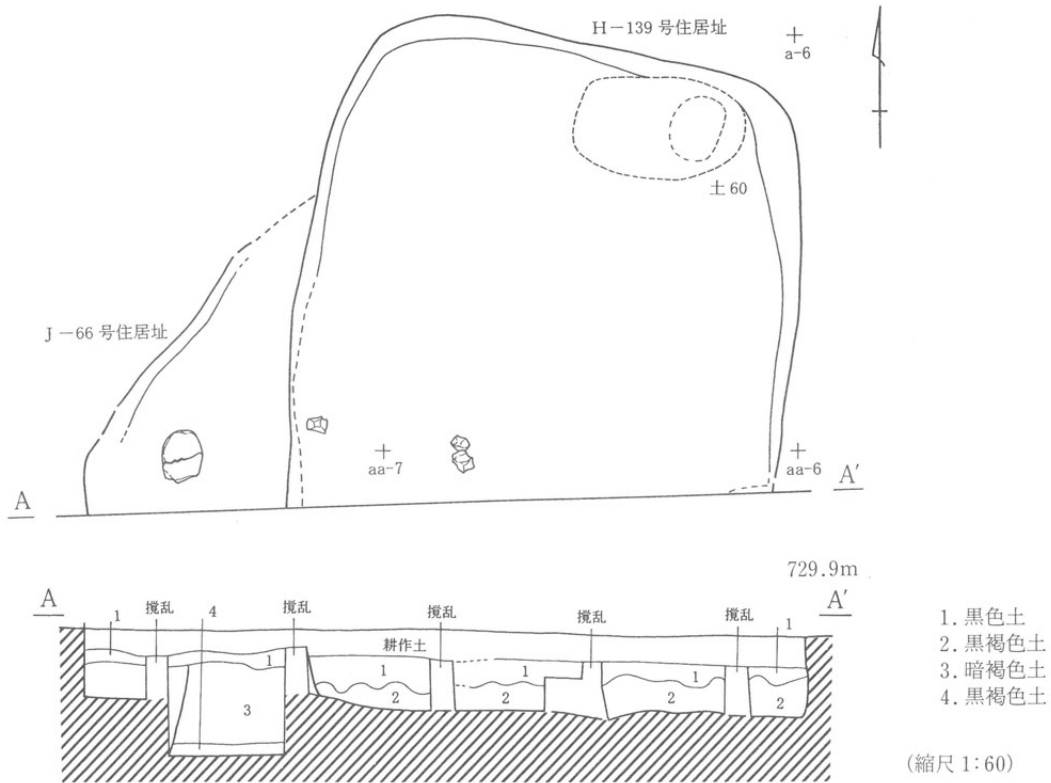
第15図 J-65号住居址

### J-65号住居址(第15図)

**遺構** 本址は調査区中央西側、e・f・g-9・10 グリッドに位置している。一部をH-138号住居址に切られている。南北4.5m、東西3.7mを測る楕円形の住居である。床面は平坦・堅緻で、遺構確認面からの壁の高さは25~30cmである。住居内からはピットが7基確認され、このうちP2、P3、P5、P7が支柱穴であろう。住居内中央に検出された炉は埋壺炉で、内部の土からは炭化材も検出された。

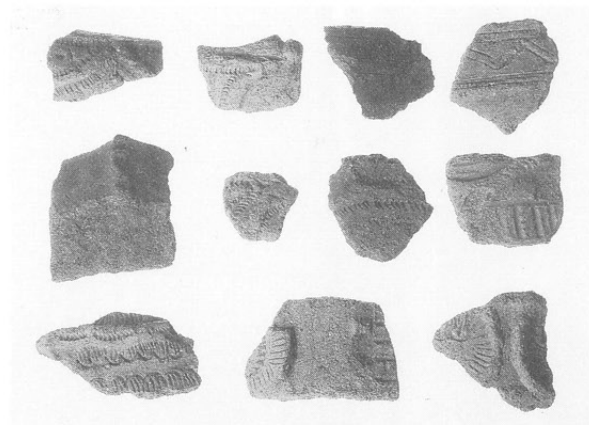
住居の時期は出土遺物により、縄文時代中期中葉Ⅱ(新道)期の住居と推定される。

**遺物** 本址は小さな住居址であるが、中期中葉(新道~藤内Ⅰ期)の土器が比較的まとまって出土している。炉体土器は新道期のもので、そのほかにも土偶が4点とミニチュア土器がみつまっている。石器では打製石斧、磨製石斧、敲石、磨石が出土している。



第16図 J-66・H-139号住居址

J-66号住居址出土土器

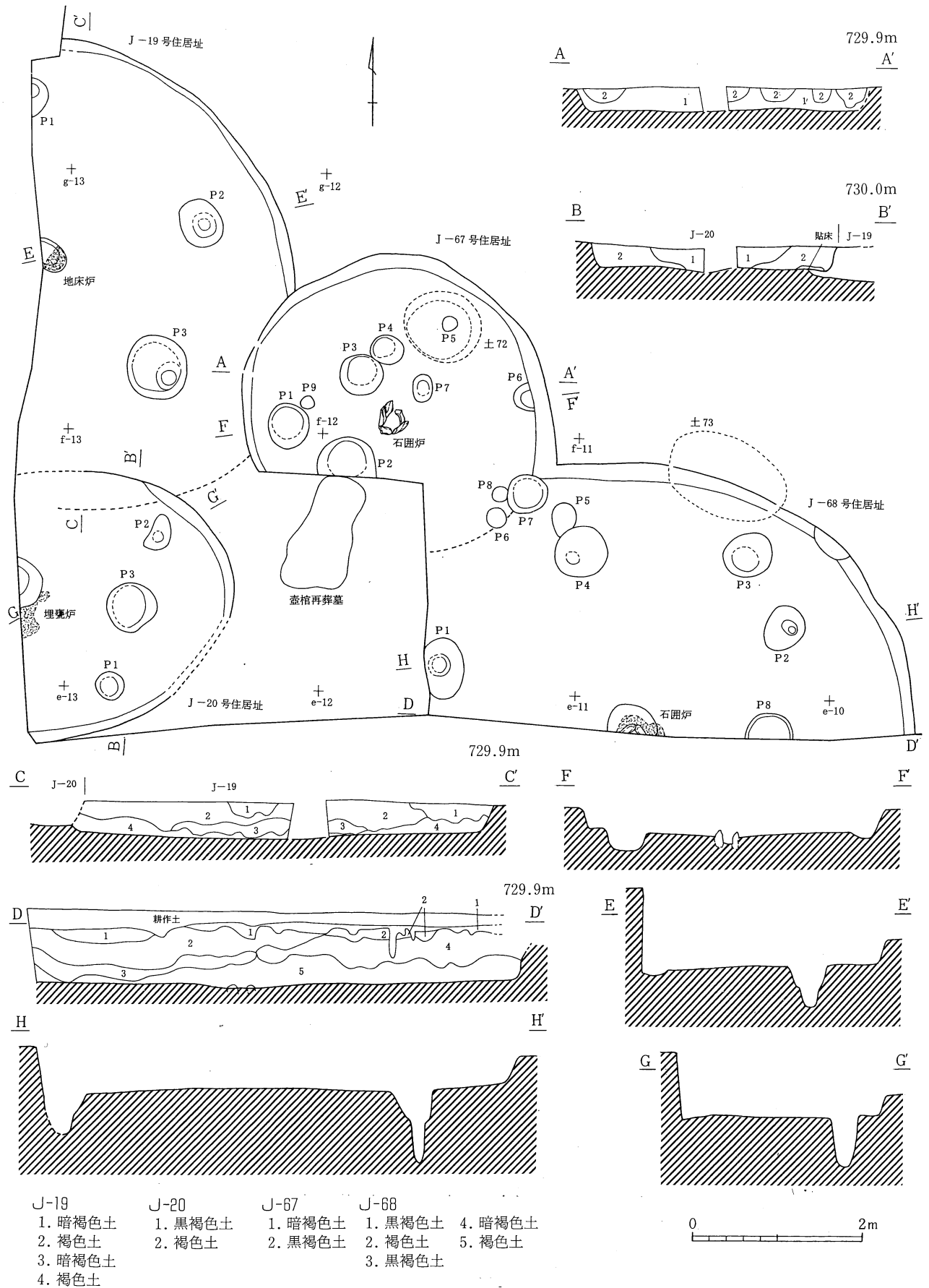


### J-66号住居址 (第16図)

**遺構** 本址はaa-7グリッドに位置している。大部分が調査区外に広がっていることや、調査区内の部分もほとんどがH-139号住居址によって切られているため、プランの特定はできなかった。わずかな残存部から検出された床はやや縮りが悪く、一部が長イモの掘削機によるものと思われる破壊を受けている。遺構検出面までの壁高は50~60cmを測る。柱穴、炉などは確認できなかった。本址南の調査外区域周辺は、平成14年度に一度調査が行われている。当時の調査で確認されたJ-37号住居址の西側に別の住居址の一部が確認されていたが、調査区外のため詳細な調査は行われなかった。おそらく当時未調査に終わったその住居址が本址につながると思われる。時期は出土遺物により、縄文時代中期中葉Ⅲ(藤内Ⅰ)期の住居と思われる。

**遺物** 調査範囲が狭いこともあり遺物の出土は少ないが、新道期~藤内Ⅰ期の土器や平出三類A土器などが出土している。石器は打製石斧のほか、非常に形状の良い石皿がみついている。

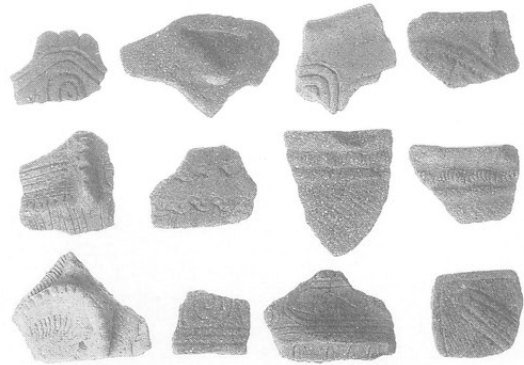




第17图 J-19·20·67·68号住居址



J-67号住居址(中央、北側より)



J-67号住居址出土土器



J-68号住居址(北側より)



J-68号住居址出土土器

### J-67号住居址(第17図)

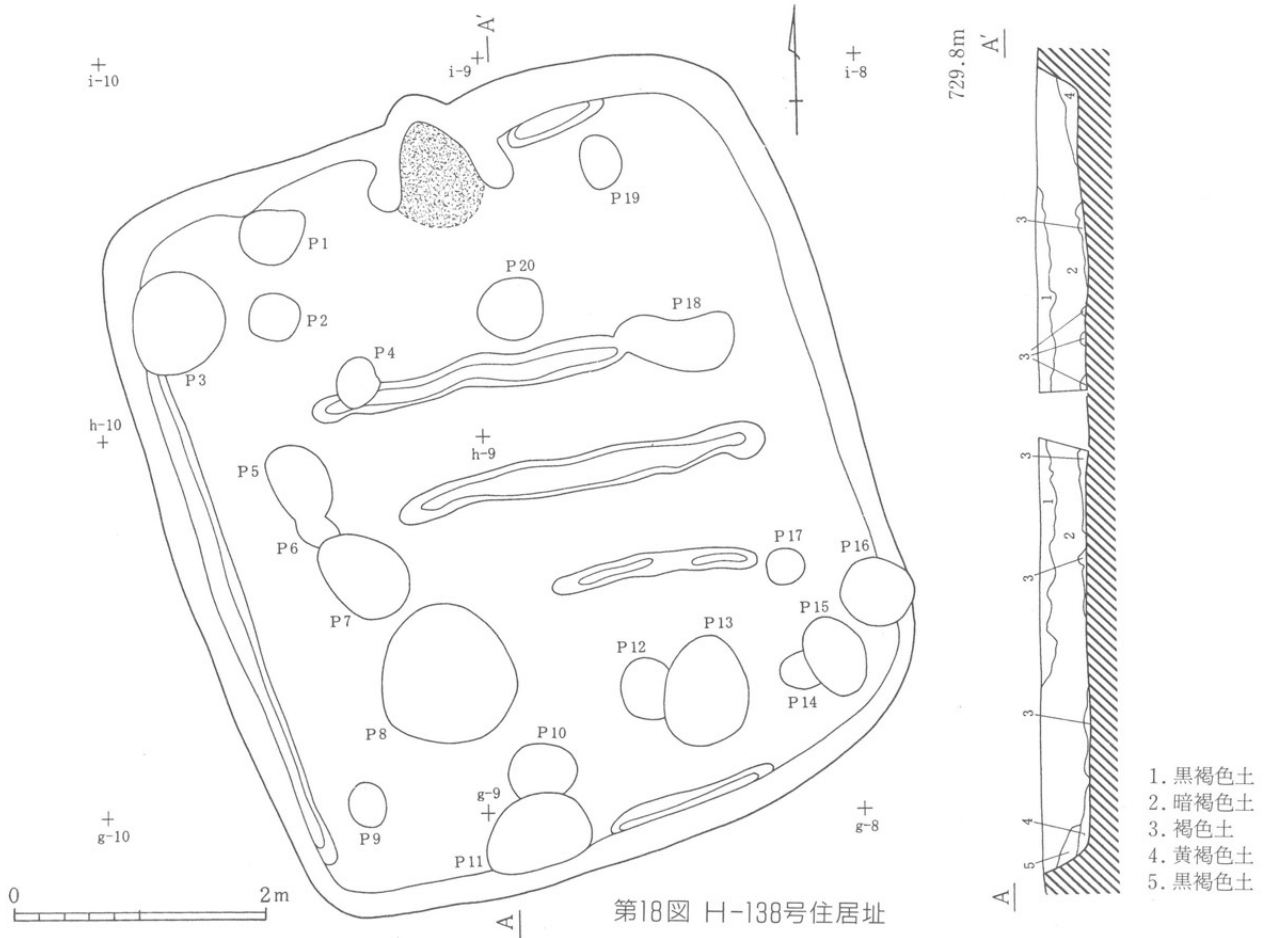
**遺構** 本址は e・f-11・12 グリッドに位置している。J-19・68号住居址を切っており、全容は確認できなかったが、南北 3.5m、東西 3.6mの円形を呈するであろう。床面は平坦でやや軟質、中央には一辺 35 cmほどの石囲炉がある。周壁の壁高は 30 cmを測る。周溝はない。ピットは 9本確認され、P5・P8・P9は支柱穴と考えられる。時期は出土土器から縄文中期中葉Ⅱ(新道)期と思われる。

**遺物** 出土遺物はそれほど多くないが、中期中葉の土器が出土しており、主体となるものは中葉Ⅱ期である。石器では打製石斧が出土している。土偶が 1点出土している。

### J-68号住居址(第17図)

**遺構** d・e-9・10・11 グリッドに位置している。南・西側は未調査だが、残された遺構の状況から直径約 6mの円形プランの住居であったと推測される。ピットは 8本確認され、P1・P2が支柱穴として使用されたと考えられる。残された周壁は約 30 cmを測り、ローム層中に掘り込まれていた。床面は平坦で堅緻で住居中央と考えられる場所からは石囲炉が検出されている。時期は出土土器から縄文中期中葉Ⅰ(貉沢)期であろう。

**遺物** 主体となる土器は中期中葉Ⅰ期であり、石器では打製石斧がみられる。



H-138号住居址 (南側より)

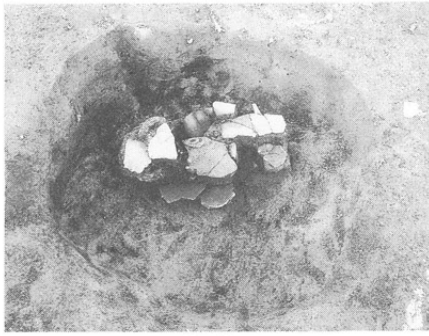


H-139号(左)・J-66号(右)住居址 (北側より)

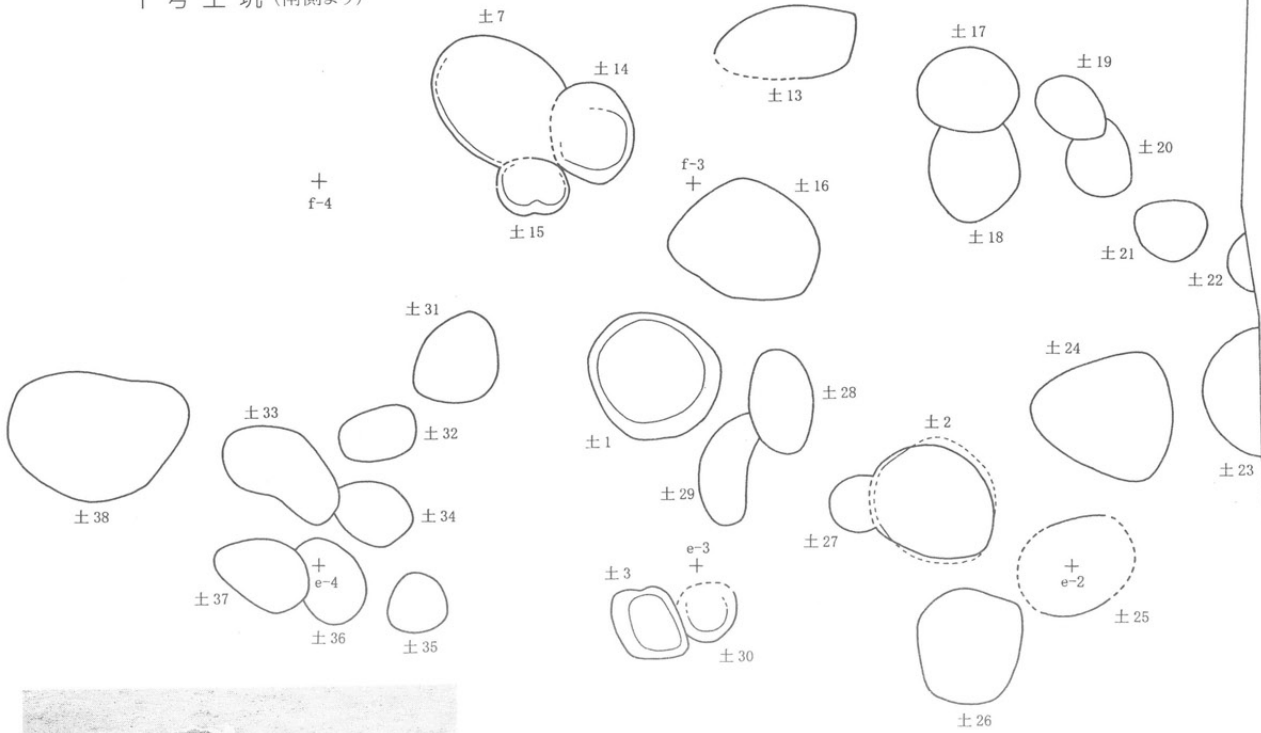
### H-138・H-139号住居址 (第17図)

**遺構** H-138号住居址は調査区中央に位置している。南北6.2m、東西5.5mの長方形の住居で北壁中央にはカマドが見つかった。H-139号住居址はaa-6グリッドに位置し、J-65号住居址を切っている。大部分が調査区外のためプランは不明である。いずれの住居址も出土した遺物から平安時代(11世紀)の住居と比定できるが、今回の発掘調査は「縄文の村地区」整備に係る調査であるため縄文時代に該当しないこれらの住居址の支柱穴、ピット、カマドなどの詳細は未調査である。

**遺物** H-138号住居址からは土師器杯、黒色土器碗、灰釉陶器碗、灰釉陶器小瓶、緑釉陶器片が出土しており、H-139号住居址からは土師器杯と砥石が見つかった。



1号土坑(南侧より)



2号土坑(南侧より)



3号土坑(西侧より)



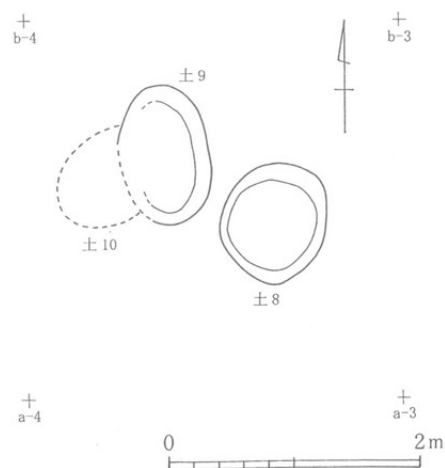
4号土坑(西侧より)

第19図 土坑群(1)

### 土坑群 (第19・20図)

調査区全域から73基の土坑が検出されているが、大部分は調査区の南東域に集中している。この場所は住居が建てられておらず、集落の中央広場として活用されていたことが考えられる区域にあたる。土坑はこの中央広場を中心にみられた。この中央広場と考えられる区域に位置していた土坑のうち、実際に調査が行われたものは9基であり、大多数は遺構確認が行われただけで掘り下げ等は実施していない。

調査が行われた土坑のうち2号土坑からは、これまでに塩尻市内から発見された縄文土器で最大となる高さ86cmの藤内I期の大形土器が横たわるように出土している。4号土坑からは群馬県周辺に多くみられる新巻類型とよばれる土器が立つように埋まっていた。この新巻類型の土器は松本平ではあまり発見されていないが、平出遺跡の平成14年調査で検出されたJ-32号住居址の炉体土器として使用されており、何らかの関連性がうかがえる。また、8号土坑からは藤内I期の深鉢や浅鉢など3個体の土器が折り重なるように発見されるなど、調査された土坑からは多くの土器が出土している。しかも、それらの土器の多くは遺構が検出された面と同様な位置から出土することが多く、土坑内部に埋められていたのではなく、土坑の上に立てられていたことも考えられる。



第20図 土坑群(2)



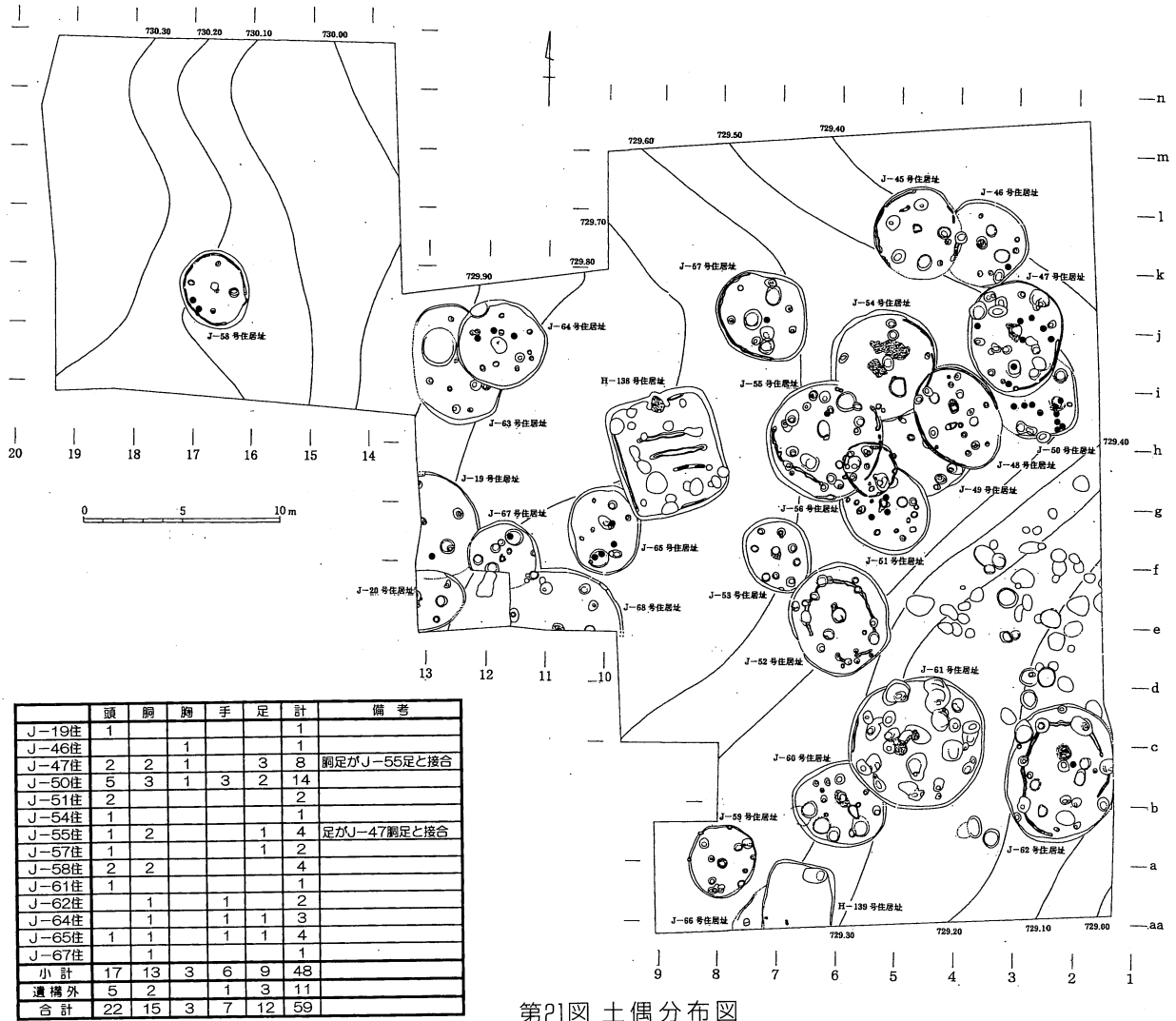
8号土坑 (西側より)



再葬墓 (東側より)

### 再葬墓

e-11・12グリッドに位置している。地表面から約20cm下がった褐色土層中で確認された。規模は、長さ1.4m、幅0.7mほどであるが、整備対象外のため一部の調査に留めた。使用土器は、再葬墓の南端部から壺形土器に小形の鉢形土器が被さって出土した。弥生中期初頭に比定される壺形土器は高さ25cm、最大径18cmで、胴が最も張った位置に直径1.3cmと1.4cmの穿孔が約90度の角度で2個あけられていた。鉢形土器は高さ7.5cm、最大幅10cmである。



第21図 土偶分布図

### 出土土偶 (21図)

今回の発掘調査では、59点の土偶が出土した。平成14年度調査では50点の土偶が出土しており、この地域で100点を超える土偶が得られたことになる。昭和20年代からの調査で平出遺跡の全域から50点に近い土偶が採集されており、これらを加えれば150点にも及ぶ土偶が出土したことになる。松本平では土偶が最も多い遺跡であり、その特殊性が目につく。

今回の調査での土偶出土状況をみると、遺構内出土が48点、遺構外11点である。遺構では全てが住居址覆土からの出土で、特別な施設に伴うものは認められなかった。J-47号住居址の8点、J-50号の14点、J-55号4点、J-64号3点、J-65号4点など、一軒の住居址から複数の土偶が出土する例が顕著である。また、J-47号出土の胴脚部とJ-55号の脚部が接合することも明らかとなった。平成14年度調査区域では7軒の住居址間で4個体の土偶について接合関係が確認されている。これらの結果も勘案すれば、遺跡の中での土偶の取り扱われ方を検証する格好の資料になるものと思われる。

この地域から出土した土偶は、縄文中期前半の時期に該当するものである。松本平は、中期後半の唐草文文化の中で大量の出尻土偶が造られた地域として著名である。一方で中期前半の土偶の出土例は余り多くはない。出土土偶は、頭部が平滑な河童形土偶が多く、また、腹部が張り出す妊娠形態も目立つ。資料の僅少な時期の土偶の実態を明らかにできる資料が得られたといえる。

## 6 「縄文の村」地区の整備計画

今回の発掘調査は、「縄文の村」地区整備の資料を得ることを目的としている。整備計画策定にあたっては、塩尻市史跡平出遺跡整備委員会により検討が加えられてきた。「縄文の村」地区整備計画の概要については平成14年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る発掘調査報告書に記載してあるため、本報告書では住居復元計画を中心に概要を述べたい。

### (1) 住居復元計画

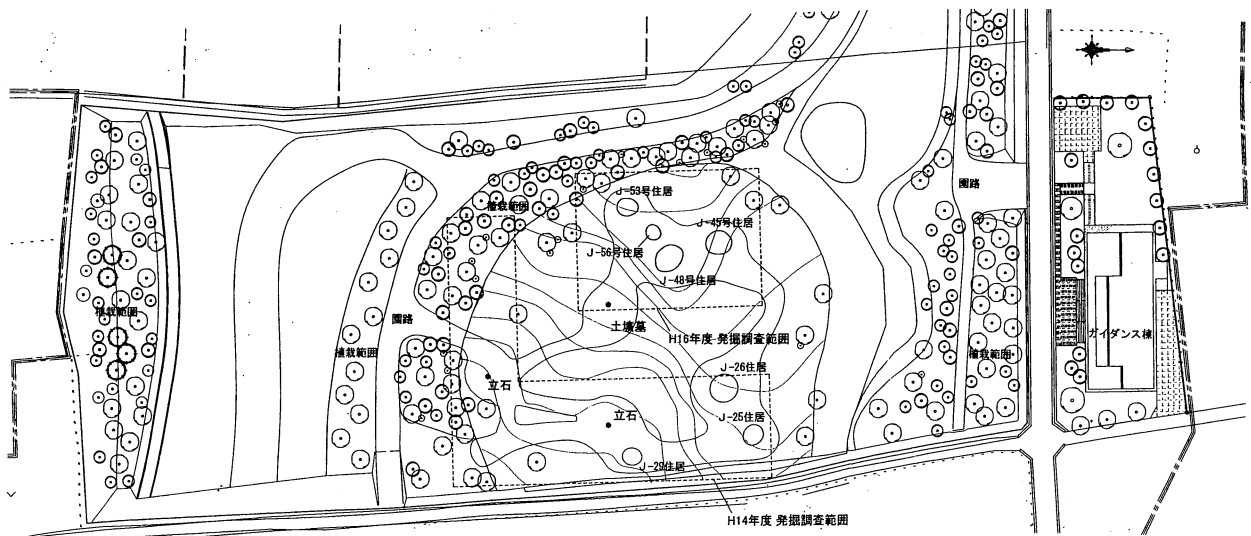
復元対象住居址の選定にあたっては、平成14年度の調査で確認され、平成16年度復元されたJ-25号、J-26号、J-29号住居址を含めて縄文中期中葉新道期の集落を復元することを前提に本調査で確認された新道期の住居址9基のうち遺存状態及び重複関係等を考慮し、J-45号、J-48号、J-53号、J-56号の各住居址を復元対象とした。また復元住居の周辺から発見された大形土器を伴った遺構の復元も併せておこない、生活感のある集落景観の復元を計画している。

整備委員会での住居復元案の検討により、各住居址の基本的な復元計画が策定された。J-45号住居址は、中型の竪穴住居で、寄棟・茅葺、柱は5本で煙出しは設けない。出入口は南東側で、石囲炉を中心部に設ける。J-48号住居址は、今回復元する4棟の住居の中では最も大きな住居である。寄棟・茅葺による竪穴住居で、柱は7本で内1本は棟持ち柱とし、煙出しは設けない。出入口は南東側で、石囲炉はほぼ中心部に設ける。J-53号住居址は、比較的小型の住居で寄棟・茅葺、柱は4本で煙出しは設けない。出入口は南東側で、地床炉を中心部に設ける。J-56号住居址は極めて小型の住居址で寄棟・茅葺、柱は棟持ち柱が2本で煙出しは設けない。出入口は南東側で、埋甕炉を中心部に設ける。

J-45号、J-48号、J-56号住居址は壁周溝が確認されていることから、竪穴側壁に壁材を設ける。いずれの住居も柱等はクリ材を使用する。また、花粉分析によりウシクサ属（ススキ等）のが目立つことから、屋根を茅葺（逆葺き）とし、強風による茅の乱れを押さえるため茅押さえを設ける。住居内は火棚を設け土器類を配置し、縄文人の生活が追体験できるよう整備する。

### (2) 地形復元計画

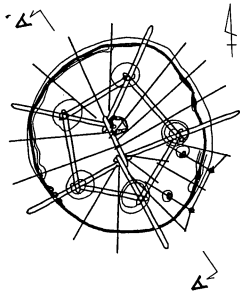
「縄文の村」の集落景観を復元する上で、当時の地形の復元を行うことは重要な要素であり、旧地形の確認を行うことは本調査における重要な目的のひとつであった。



第22図 「縄文の村」整備平面図

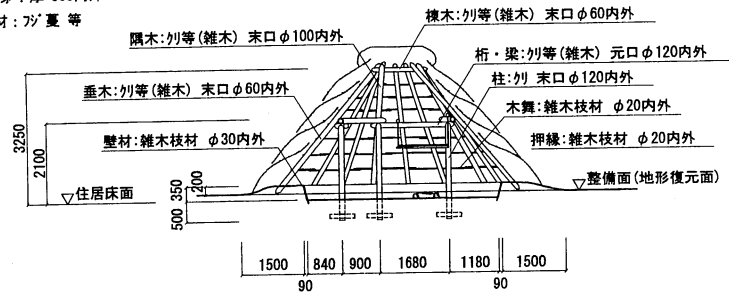
発掘調査の結果、微地形的には南東方向へのゆるやかな傾斜が認められ、その北側の高まりにやや平坦な地形が形成され住居址が集中していることが確認された。「縄文の村」の整備にあたっては、2年度にわたる発掘調査によって得られた資料を基に地形復元を行い、復元住居7棟、立石2箇所及び大形土器の配置を行ない当時の集落景観を復元する。

J-45号住居 復元検討図

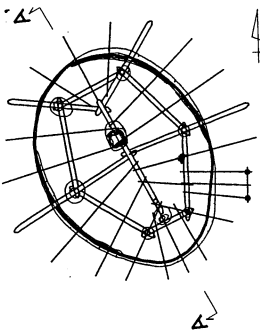


A-A' 断面

屋根 茅：厚 500内外  
結束材：フシ藁等

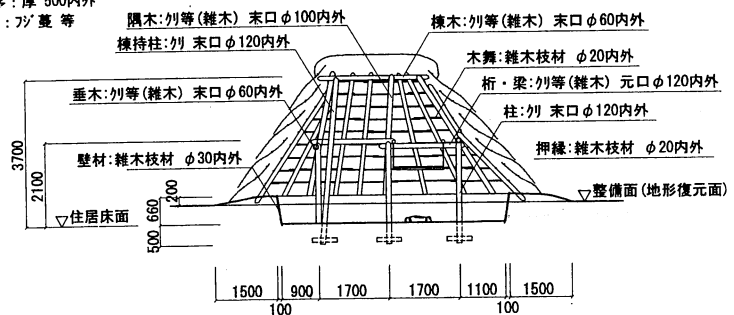


J-48号住居 復元検討図

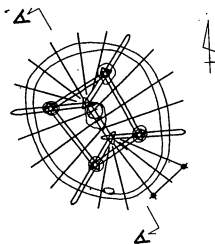


A-A' 断面

屋根 茅：厚 500内外  
結束材：フシ藁等

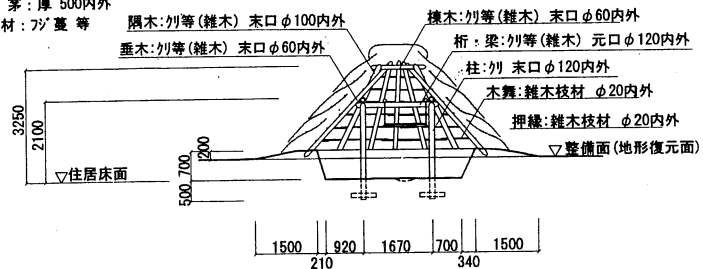


J-53号住居 復元検討図

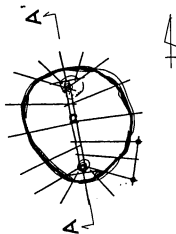


A-A' 断面

屋根 茅：厚 500内外  
結束材：フシ藁等

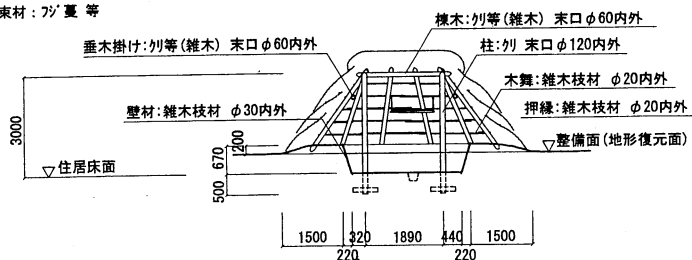


J-56号住居 復元検討図



A-A' 断面

屋根 茅：厚 500内外  
結束材：フシ藁等



第23図 住居復元検討図



## 7 ま と め

平出遺跡の平成 16 年度の発掘調査は、遺跡の中央部に位置する「縄文の村」整備地区を対象として実施された。「縄文の村」整備地区では既に平成 14 年度に整備区域の東側部分を調査しており、今回は隣接するその西側を調査対象とした。今回の調査では、平成 14 年度調査にひきつづき該期の集落構成をうかがい知るに足る住居址や土坑が良好な遺存状態を保って発見された。

以下、調査成果の概要をまとめておきたい。

1 「縄文の村整備地区」に調査地域を設定し、縄文中期の住居址 26 軒・土坑 73 基、弥生時代再葬墓 1 基、平安の住居址 2 軒が発見された。

縄文中期の住居址の所属時期は、九兵衛尾根Ⅱ期 7 軒、猪沢期 2 軒、新道期 8 軒、藤内Ⅰ期 4 軒、藤内Ⅱ期 2 軒、井戸尻Ⅰ期 3 軒である。いずれも中期前葉・中葉に該当するもので、この地域では縄文中期前半を主体とする集落が継続的に存在していたことが明らかとなった。

2 平成 14 年度にはその存在が知られていなかった土坑群が今回の調査区東側から発見されたことは重要な成果である。土坑群は一部住居址と重複しているものもあったが、その大半は住居址が設けられていない中央広場とも考えられる空間に設けられている。住居址はこの土坑群を取り囲むようにして造られており、環状集落の集落形態が明らかになった。この土坑群の中の幾つかの土坑上からは大型土器が出土しており、土器が土坑上に立てられていたものと推測された。土器が立てられた土坑群を内包した中央広場の周りに住居群が配置される集落形態が復元される。

3 整備対象時期の新道期の住居址 8 軒は、土坑群の北側に位置している。この土坑群のなかの 4 号・6 号土坑上からは新道式土器が立てられた状態で出土している。平成 14 年度の調査結果も勘案すると土坑群の北側に弧状に住居群が展開する集落構造が明らかとなった。また、平成 14 年度調査では住居群の南から立石 2 基も検出されている。このような調査結果から「縄文の村」の復元整備では、土器や立石を立ち並べた広場を南側に設け、その北側に弧状に家が立ち並ぶ景観を復元することになった。

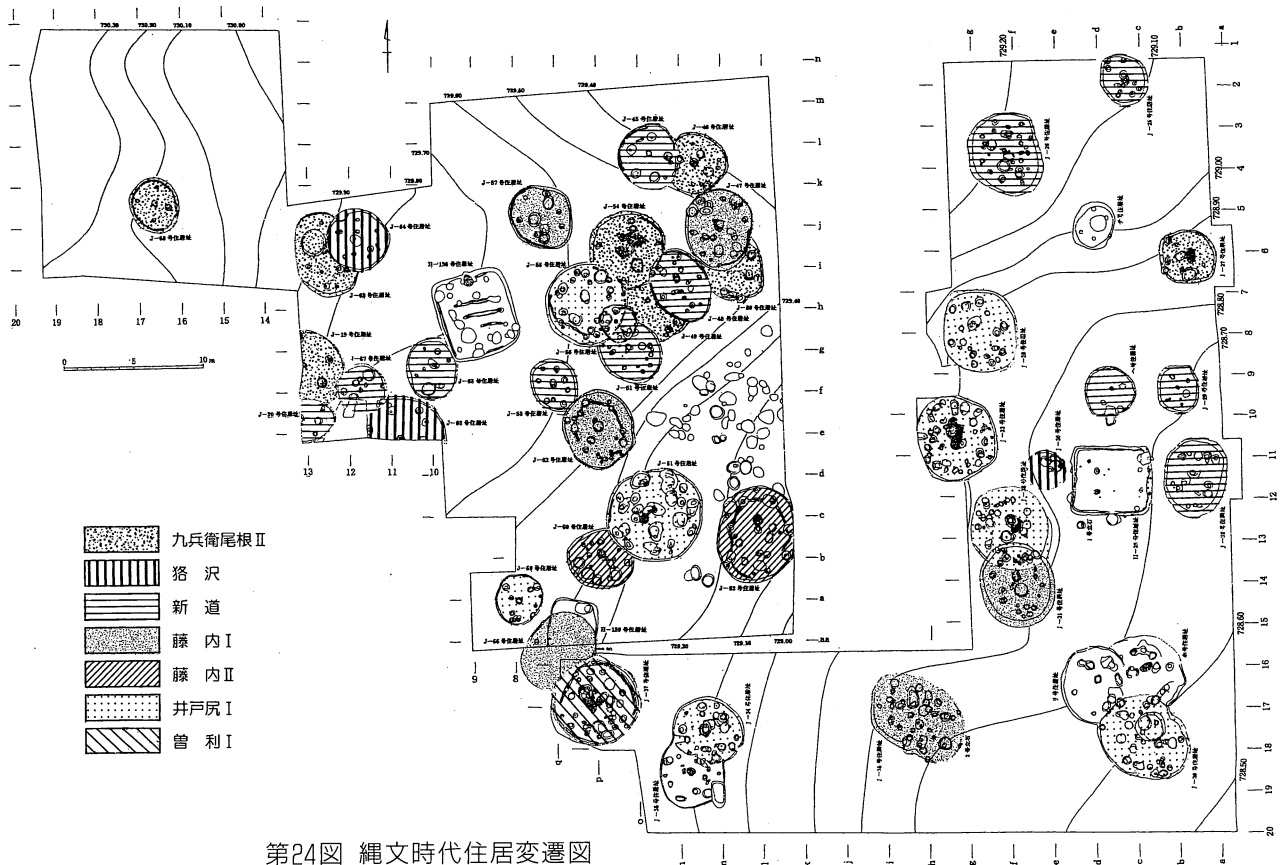
4 弥生時代の再葬墓は、平出遺跡において弥生時代の遺構としては初めての発見である。弥生時代前期末から中期初頭の土器は、今までの調査によって遺跡中央から西側にかけての地域でかなりの量が採集されている。生活拠点である住居址の発見ではないがこの再葬墓の検出によって、遺跡中央地域に該期の活動拠点が存在することが確実に became ことは重要な成果である。

5 発掘調査は、地表面から手作業による掘り下げにより、耕作土下 30～40cm の褐色土層から住居址の掘り込みが観察され、当時の生活面に近い面を確認できた。これにより整備時の遺構保護盛土を現地表面から最低でも 40cm 以上が必要であることが確認された。

6 J-45・48・53・56・135 号住居址の炉から発見された遺存体の分析では、オニグルミ、イネ科の果実、ナデシコ科の種子、炭化材としてクリが認められた。また、今回復元した J56 号住居出土のクリ材の放射性炭素年代測定では、補正年代 B P 4420±40 の測定年代が得られている。この測定年代から「縄文の村」の整備はおよそ 4500 年前の景観復元を図ったといえる。

6 平成 14 年度および今回の平成 16 年度の調査によって明らかになった縄文時代集落の変遷を簡単に概観しておきたい。

九兵衛尾根Ⅱ期 7 軒の住居址が広場の北側に設けられている。20m の間隔を置いて東側に 4 軒、西側に 3 軒があり、J-49・54 号が重複していることから少なくとも 2 時期に細分できる。



第24図 縄文時代住居変遷図

**狹沢期** 3件の住居址があり、広場を囲んで西側に2軒、東側に1軒が配置されている。九兵衛尾根Ⅱ期には明確でなかった広場がこの時期に出現する。しかし、住居の軒数は前代より減少している。

**新道期** 13軒の住居址が検出されており、住居が激増する。その住居址は広場を南側に臨み弧状に展開している。その広場には土器を伴った土坑が造られ、立石も設けられている。中央の広場を意識したムラ造りがなされていたことがうかがえる。

**藤内Ⅰ期** 6軒の住居址がある。それまで居住域とされてこなかった広場南側にも住居が進出し、広場を囲んだ環状集落の形態となっている。住居址の重複関係もなくすっきりした集落形態を保っている。広場には大型土器を伴った土坑も設けられている。

**藤内Ⅱ期** 広場の南側に2軒の住居址があるだけで、狹沢期から次第に発達してきた集落もこの時期には衰退した姿となる。

**井戸尻Ⅰ期** 8軒の住居址があり、広場を囲んで東側に4軒、西側に4軒配列している。住居址の配置を見ると、九兵衛尾根Ⅱ期から藤内Ⅰ・Ⅱ期まで集落の中心が次第に南側に移動しているように見受けられる。

**曾利Ⅰ期** 広場の南側に1軒だけ住居址が発見されている。この地域における縄文集落の最後の住居址である。以後の時期の住居址はより西側の地域に分布しており、集落の中心地帯の移動が行われたと推定できる。

2ヵ年の発掘調査によってこのような集落の変遷をたどることができるようになったが、その中で集落形態がある程度まで復元可能な新道期の集落を「縄文の村」として整備することになった。

最後に、発掘調査に携わっていただいた多くの皆さんに感謝し、お礼申し上げたい。

## 史跡平出遺跡発掘調査概報抄録

ふりがな	しせきひらいでいせき							
書名	史跡平出遺跡							
副書名	平成16年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	小林康男・小松 学・塩原真樹・中野実佐雄							
編集機関	塩尻市教育委員会							
所在地	〒399-0738 長野県塩尻市大門七番町4番3号 / Tel.0263-52-0280							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらいでいせき 平出遺跡	ながのけんしおじりしおおあざ 長野県塩尻市大字 そらが 宗賀389-1 他	20215	146	36° 6' 3"	137° 56' 45"	2004 6.28 ～ 2005 6.23	1,500 m <sup>2</sup>	記念物保存修理事業（環境整備）に係る発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平出遺跡	集落址	縄文時代	竪穴住居址 26軒 土坑 73基	縄文土器・石器・土偶・有孔土製円板・「の」字状石製品		平出遺跡の縄文中期前半集落の分布状況が明らかになった		
		弥生時代	壺棺再葬墓 1基	弥生土器壺・鉢		平出遺跡から初めて弥生時代の遺構が確認された		
		平安時代	竪穴住居址 2軒	土師器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器		10～11世紀の集落の広がりが確認された		

---

---

## 史跡平出遺跡

——平成16年度記念物保存修理事業  
(環境整備)に係る発掘調査概報——

平成18年3月31日発行

発行 長野県塩尻市大門七番町4番3号

塩尻市教育委員会

---

---

